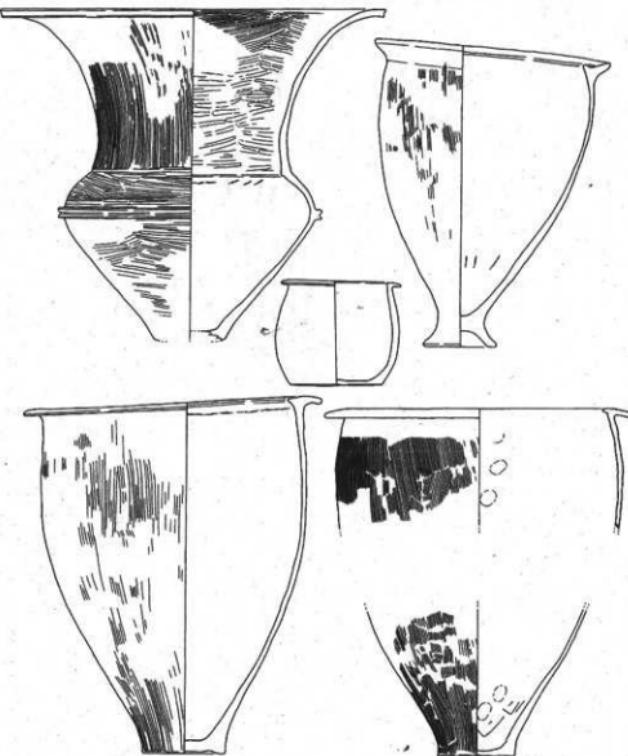


国見町文化財調査報告書(概報) 第5集

じゅう その
十園 遺跡 II

—国見町多比良地区町営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—



4区 SB02出土土器 (33~34P)

2005

長崎県国見町教育委員会

第3節 弥生時代後期の環濠と住居跡（第30～55図 図版5・6・14～19・24～31）

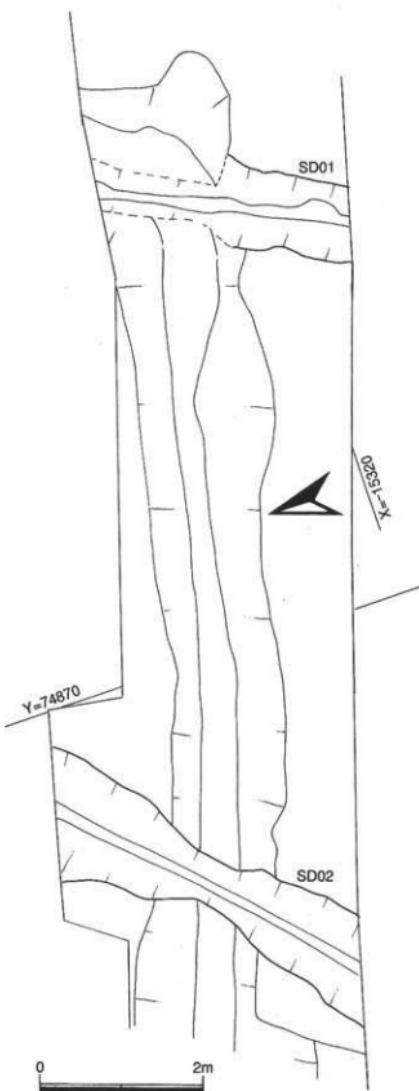
土黒川に面した西側にあたる26区から29区（第2図・第15図）において弥生時代後期から古墳時代にかけての環濠2条および方形の堅穴住居跡2軒が検出されている。時期的にはそれほど差はないと思われるが、同時期のものとして紹介していく。第15図にみるように中期の環濠と直角に交わるよう後に後期の環濠二条が検出され、その西側で方形の堅穴住居跡2軒、掘立柱建物1軒が調査区内で発見されている。中期の環濠と直交するようにあることから、中期の環濠集落の中心とは異なる地点が後期の環濠集落の中心となる可能性がある。後期の環濠がどのような広がりを持っているのかは現段階では予測が難しいが、中期の環濠よりも広い範囲に拡大しているものと考えておく。以下に、環濠と住居跡の詳細を紹介していく。

環濠（第30図 図版5）

26区において、二条の環濠が検出された。主軸はSD01が真北より東に26度傾き、SD02が真北より東に46度傾いている。同一の主軸をとらないが、蛇行しながらも南北方向を主体とした二条の一連の環濠と考えられる。二条の検出面での間隔は8.1m、覆土の状況や出土土器の形式から同一時期に掘削され、同一時期に埋没したものと思われる。

中期の環濠とは26区の北側で直交するような関係となる。26区北側の畑地内でソイルマーク（図版2）として中期の環濠の延長が現れており、この畑地内で直交することは間違いないようである。中期の環濠が拡大されたものとして26区SD01・02があるのか、それとも中期の環濠の埋没後に新たに環濠が掘削されたのか、大きな問題が残る。

環濠の出土遺物には多数の甕があり、周辺に住居跡などの生活の痕跡が想定できる。環濠出土品は後に報告するが、完全な形に近い状態まで接合した資料が多く、出土状態は一気に人為的に埋められたことが容易に想像できる。中期の環濠の埋没状況と比



第30図 26区 SD01・02(1/60)

べると大きく異なる点である。埋没に関する社会的環境が影響したのであろう。

また、26区南側の畑地では圃場整備工事中に多数の壺棺片や弥生土器（生活什器中心）片が採集されており、第2章第2節（第11～14図 写真①）で紹介している。この付近には中期の壺棺墓群の存在も想定でき、後期の環濠がこれらの壺棺墓群を切るようにして営まれていることも容易に復元できる。

26区 SD01（第31図 図版14）

26区東側で検出されたもので、北側半分は近現代の溝により上面が失われ、底面のみが確認できた。検出面は黄褐色粘質土層で、検出面での幅は最大約1m、深さは55cm、長さは3.2mである。断面形は「V」字の類に入るであろうが、底面が広く幅は15～20cmある。壁の傾斜は東側で60度、西側で50度ほどあり、段などをつけることなく掘削されている。底面は検出面に沿うような形となるが、一部では幅が30cm近くになる。調査区分の南北方向にのびるものと思われる。

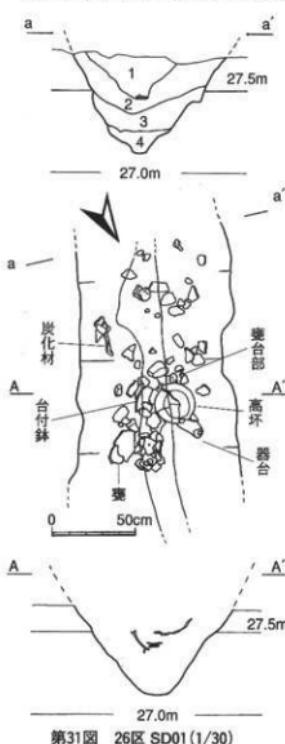
覆土は4つに分層でき、基調土は黒褐色土層である。水が常時流されていたような土層は見られない。

1層：黄褐色粘質土と黒茶褐色粘質土を少々含んでおり、しまりがあり非常に硬質である。

2層：黄褐色粘質土ブロック（1cm大）を多く含み、しまりがありやや硬質である。

3層：黄褐色粘質土ブロック（1～2cm大）を多く含み、黄茶褐色ブロック（1～2cm大）を少々含み、しまりがなくやわらかい。

4層：黄褐色粘質土ブロックが多く混入し、粘性が強い。遺物はほとんど含まれない。



第31図 26区 SD01(1/30)

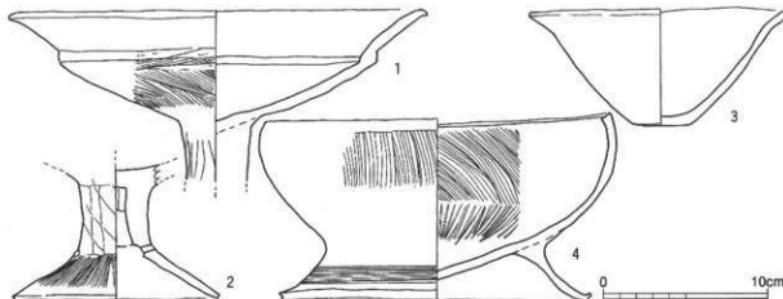
遺物の集中は3層上面にあり第31図や図版14にみると比較的大きな破片で入り込んでいる。土器の多くは環濠の壁面に張り付いた状態での出土ではなく、埋まりかけの環濠に入り込んだ状態である。炭化材などもみられ、これも土器と同じような出土状態である。土器の集中からすると土器は東側から流れ込んでいる状況に復元できる。第31図にある遺構内の土器は第32図1・4がエレベーションにかかっている土器であり、第34図2・6は平面図で確認できる個体である。第32図1は壺部から脚部上位までは完全な形に復元できたが、脚部は調査区内では検出できなかった。第32図4は、SD02覆土出土品によりほぼ完全な形にまで復元できた資料である。第34図2は頸部から底部近くまでの胴部片で、約1/3周までの接合である。第34図6は上部を欠く以外はすべて接合でき、26区SD02の最下層にあたる部分からの出土品と接合関係にある。このように土器は一部を失っているもの、半分以上のもの、そしてほとんど完全な形に復元できるものがある。この点は23区で検出されている自然に埋没していたと思われる中期の環濠と比較すると、それとは性格の異なる埋没過程であることが容易に理解できる。

26区 SD01出土土器

（第32～34図 第8～10表 図版24～26）

第32図は壺や高坏、第33図は壺、第34図は壺をそれぞれ図化している。出土土器のすべではなく、接合作業が一段落した段階での特徴的なものを選別し報告している。

1は口縁部直徑26.8cm、壺部高7cm、壺部に段をもつ高坏である。脚部は失われているが、壺部との接合部分まで残り中実である。外面調整は壺部上段が横方向のナデ仕上げ、下段が刷毛調整仕上げ、内面は上段が横方向のナデ仕上げ、下



第32図 26区 SD01出土土器(高環・鉢1/3)

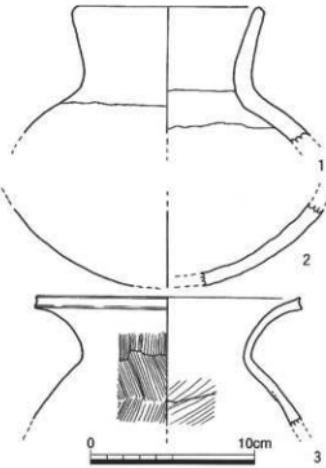
段が回転利用のミガキ調整である。環部内面は中央部分が窪んでおり、脚部との接合による所産と思われる。2は高環脚部で、脚部のみほぼ完全な形に復元できた。脚部は中実ではなく粘土を円筒状に丸めて環部に接合している。外面は裾部が刷毛調整仕上げ、脚部がヘラ削りである。脚部は接合時に右方向にねじりこんであり、その痕跡が残る。3は1/2程度まで接合できた小型の鉢である。口縁部は復元で15.8cm、高さ7.2cmである。口縁下1.5cmの部分で外に反する点が特徴的である。4は鉢で尖り気味の底面に台が付く。ほぼ完全な形にまで復元できたもの。鉢部は口縁部が丸く内溝する点が特徴的で、口縁端部は断面が方形で端部の仕上げは鋭い。台は鉢の口縁部下8cmのところに貼り付けられ、台の端部は同じく鋭い仕上がりで稜線がしっかりとつくられている。内面は放射状に外方に刷毛調整があり、中心部から中位まで放射状のミガキ調整が加えられる。外面には刷毛調整の後に、下半に横ナデ調整が加えられ、底部には放射状にミガキ調整がある。

第33図1は壺の口縁部である。直立する口縁部に丸みのある胴部となり、器壁は口縁端部がやや薄くなるがほぼ均等につくられる。2は胎土と色調が類似しており、1と同一個体と思われ、復元すると口縁部が直立し胴部が球形となり、高さ27cm程度となる。調整は胴部が内外面ともに斜位主体の刷毛調整である。3は壺の口縁部であり、端部が強く外反するものである。外面は斜位の刷毛調整主体、内面は刷毛調整のちナデ調整である。

第34図1～5・7は壺であるが、6は器台である。1はほぼ完全な形に復元できた台付壺である。口縁部はやや傾くが直径19cm、高さ34cm、脚台の高さ5cm、脚部幅の直径10.3cmである。外面は縦方向主体の3段階に分かれた刷毛調整で、内面はナデ調整である。口縁部はまっすぐ外反し、端部は断面方形となり稜線は比較的しっかりしている。頭部内面の稜線もしっかりつくり、頭部直径は15.5cmとなり、胴部最大径は中位よりやや上に位置し直径19cmとなる。2は頭部から胴部へかけての破片である。内面に斜位の刷毛調整、外面は中位以下に縦方向の削り、上位は刷毛調整となる。3は壺の口

第8表 26区 SD01 出土土器(高環・鉢)観察表

図	番号	種別	法寸(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考
32	1	弥生土器 高環	口縁部直徑 26.8 残存高 11.4	上半: 横ナデ 外面 下半: 刷毛	角閃石、白色粒子、石英 外面: 橙(Hue7.5YR7/6)	
	2	弥生土器 高环(脚部)	脚部直徑 12.3	内面 横ナデ・回転利用のミガキ 外面 脚部: ヘラ削り、脚部: 刷毛	内面: にじむき(Hue7.5YR7/4) 角閃石、雲母、白色粒子	
	3	弥生土器 鉢(小型)	口縁部直徑 15.6 残存高 7	内面 上半: 横ナデ 外面 下半: 細い綿刷毛が残る	角閃石・白色粒子(風化礫粒子)多い 橙(Hue2.5YR6.6/6-8) 底部外面黒斑、内面灰白-黒のスヌ	
4	4	弥生土器 鉢(台付)	口縁部直徑 21 器高 11.4 脚部直徑 18.8 脚部最大径 22	内面 上半: 放射状の刷毛 下半: 回転利用の横ナデ 上半: 外へ刷毛 内面 下半: 刷毛の上に放射状ミガキ	雲母・角閃石多い、赤色 浅黄橙(Hue10YR8/3)	



第33図 26区 SD01出土土器(壹/3)

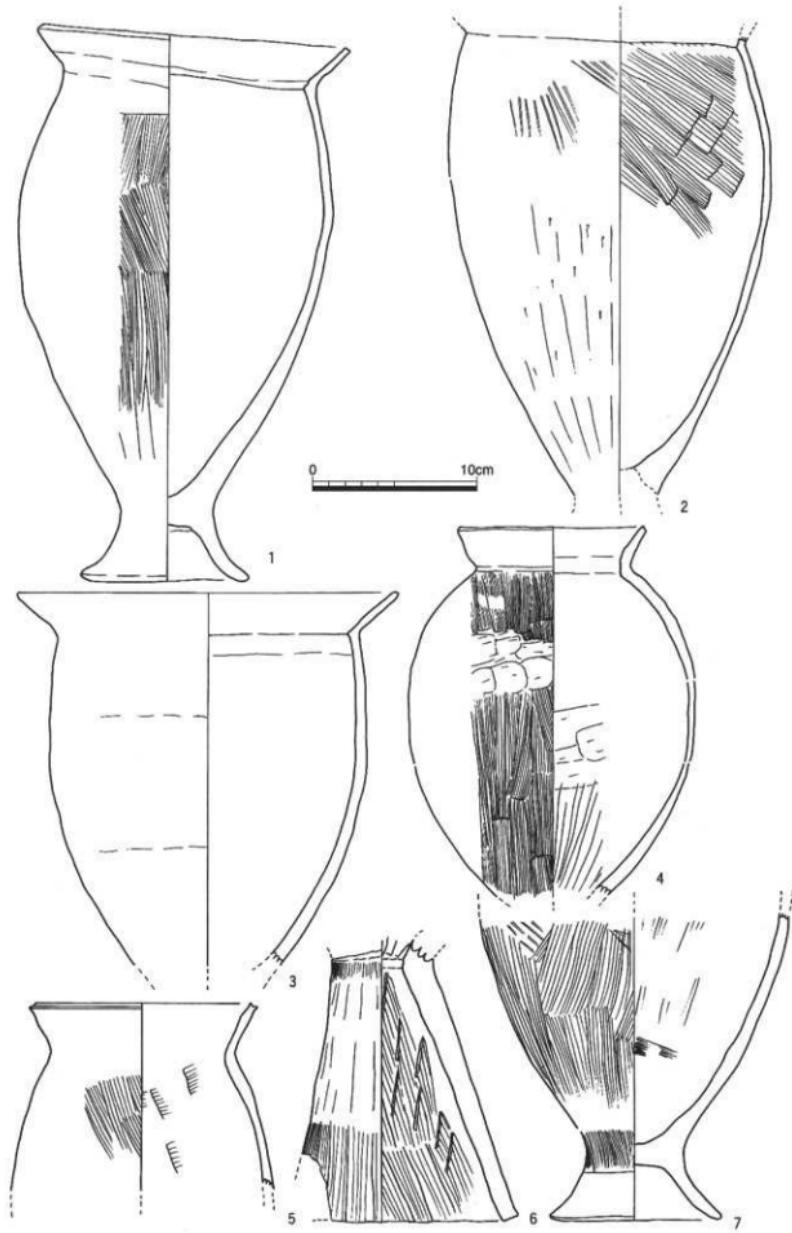
縁部から底部にかけて残り、頸部と胴部最大径がそれほど変わらない形態である。4は底部がみられないが尖底と思われる甕である。口縁部は直立に近く、胴部最大径は中位にあり、内外面に刷毛のほかに横方向の削り調整を加えている。削りの行われる胴部中位では器壁が3mm以下となる。形態的に1~3・5などと違い、頸部が細く口縁部の直径が胴部最大径にくらべ小さい形態となる。また、調整の面でも横方向の削りを上位に施している。5は小型の甕の口縁部片である。口縁部は復元の直径が13cm、胴部最大径は15.6cmとなる。内外面刷毛調整がみられる。口縁端部は断面方形となり、第32図4や第33図3とおなじように鋭い仕上がりとなっている。6は器台でSD02の最下層の出土品と接合関係にある資料である。内外面ともに刷毛調整を多用している。裾部直径は12~13cmとなる稍円形で、頸部は直径6.2cmとなる円形となる。端部は断面方形で接地面は内側端部のみとなる。7は1や2よりもやや大きめの台付甕底部片である。脚部裾の直径は10.5cm、台部高さは4.5cmとなる。

第9表 26区 SD01 出土土器(壹) 観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考	
33	1	弥生土器 甕	口縁部直径 残存高	11.8 8.4	外面 上半: 横ナデ 下半: 斜位主体の刷毛 内面 上半: 横ナデ仕上げ 下半: 斜位主体の刷毛	角閃石多い、白色粒子 外面～内面: 口縁部: 橙(Hue2.5YR6/8) 内面: ぶい黄橙(Hue10YR6/4)	
	2	弥生土器 甕	残存高	5	外面 刷毛 内面 長いストロークの刷毛	角閃石多い、白色粒子 外面～内面: 1級部: 橙(Hue2.5YR6/8) 内面: ぶい黄橙(Hue10YR6/4)	
	3	弥生土器 甕	口縁部直径 (復元径)	16	外面 横ナデ、刷毛斜位 内面 上半: 刷毛のち横ナデ 下半: 刷毛のちナデ	角閃石多い、白色粒子(0.2~0.7mm) にぶい橙(Hue7.5YR7/4) 内面: 橙(Hue5YR6/6)	

第10表 26区 SD01 出土土器(甕・支脚) 観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考	
34	1	弥生土器 甕(台付)	口縁部直径 (復元径) 器高 胴部最大径	20 34 19.2	外面 口縁部: 部: 横ナデ 胴部: 刷毛 内面 口縁部: 横ナデ 胴部: ナデ	角閃石、雲母、石英、赤・白色粒子 生地粗い にぶい橙(Hue7.5YR6/4~7/4)	歪みがある
	2	弥生土器 甕(台付)	胴部最大径 残存高	19.7 28	外面 ケズリ 内面 ナデ	角内石、白色粒子(安山岩風化礫粒子) 明褐色(Hue10YR7/6) 内面: 橙(Hue5YR6/6)	1/3面黒漆
	3	弥生土器 甕	口縁部直径 残存高 胴部最大径	23 22.5 19.2	上半: 横ナデ 外面 脇部中位: 斜位ナデ 下半: ケズリの後斜位ナデ 内面 横ナデ、刷毛の後斜位ナデ	角閃石・白色粒子多い、雲母粒子 橙(Hue2.5YR6/8) 口縁～脇部黒漆(5~7cm)	
34	4	弥生土器 甕	口縁部直径 残存高 胴部最大径	11.5 14.3 17.2	全體的に刷毛 外面 脇部中位: ケズリ 内面 上半: 刷毛後ナデ 脇部中位: ケズリ 下半: 刷毛	角閃石・雲母多い、石英: 白色粒子 外面: 黑灰(Hue7.5YR4/1~5/1) 内面: ぶい黄橙(Hue10YR7/3)～ 浅黄橙(Hue10YR8/3)	生地粗い 黒漆
	5	弥生土器 甕(小型)	口縁部直径 (復元径) 残存高	13 11.4	外面上半: 横ナデ 下半: 斜位の刷毛 内面上半: 横ナデ	角閃石・白色粒子多い にぶい橙(Hue7.5YR7/4) 内面: 橙(Hue5YR6/6)	
	6	弥生土器 器台	胴部 最大径 残存高	15.6 17.2	上半: 横ナデで削す 外面上半: 刷毛 内面 刷毛調整	角閃石・雲母多い、白色粒子 橙(Hue7.5YR7/6) 内面上部黒い	黒漆 (2~3cm径)
7		弥生土器 甕(中型)	残存高	18.8	胴部: ナデ、脚部: 刷毛 裾部: 刷毛の上から横ナデ 上半: 縦刷毛後ナデ削す 内面 脇部中位: 刷毛 下半: 斜位による強いオサエヒナデ	角閃石・白色粒子多い 橙(Hue7.5YR7/6) 外面上部黒い 内面: 底部が輪状にスス付着	



第34図 26区 SD01出土土器(堺1/3)

弥生時代後期の環濠と住居跡

26区 SD02 (第35~45図 図版5・14~16・26~30)

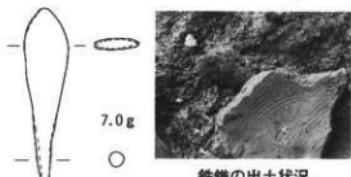
26区SD01西で検出され、中近世の溝により削られた部分があるが、南北方向に軸をもつ環濠である。検出長3.8m、最大検出幅は北側で1.3m、深さは1mである。第36図はその断面図、第37図は平面図と等高線図である。断面図は環濠に直行する形ではなく調査区壁面を実測したものである。断面形は「V」字となり、50度前後の傾斜がつけられており、底面の幅は15~20cmである。第36図の等高線図にあるように、センター（10cm間隔）はほぼ等間隔であり、段をつけて掘り方をかえているようなことはない。ただし北側断面図にあるようにⅢ層の入り込みが27.75mあたりで水平になっており、この部分は段を作っていたのか、生活面かであろう。底面は北側が10cm程度低くなる。

覆土は大きく4つに分層でき、SD01の覆土に対応すると思われる。基調土は黒褐色土である。

- I-1層：黄褐色土粒子と黒茶褐色土粒子とが多く含みややしまりがある。
- I-2層：黄褐色土粒子を多く含む。しまりがある。
- I-3層：黄褐色土と黒茶褐色土とをブロック状にまばらに含み、炭化物粒子を多量に含む。
しまりはややある。
- I-4層：黄褐色土のブロック（1~0.3cm大）、黒茶褐色土のブロック（0.5から）を含む。
- I-5層：黄褐色土のブロック（1~0.3cm大）を多く含み、しまりがない。
- II-6層：黄褐色土ブロックと黒茶褐色土とのブロック（1~0.3cm大）、黄褐色土粒子を含む。
炭化物粒子（1~0.5cm大）もみられる。しまりはない。
- II-7層：粘性の強い黒褐色土で、黄褐色土粒子を少量含む。
- III-8層：黄褐色土と黒茶褐色土のブロック（1cm大）そして炭化物（1cm大）を多く含む。
土器片（3cm大）を多く含み、焼土粒子も多い。しまりはない。
- IV-9層：混入物の少ない灰褐色粘質土で、底面にたまたま粘性の強い土層。
- IV-10層：8層と似るが黄褐色ブロックの混入が多く、堆積が均一である。

覆土の状況は9層と10層は自然な形での堆積と考えられる。比較的遺物も少なく、10cm程度の層厚がある。8層以上が遺物を多く含む堆積となり、大きく3つに分けられるが、下層（III）と上層（II）とで比較的大きな土器片や炭化材が検出された。また、8層中には粘土塊も土器片に混じって検出された。第37図の平面図にその集中を図化しておいた。下層には大きめの破片の土器が多く、粘土塊や礫なども検出された。また、環濠の壁に張り付くような状態で出土している土器片もある。鉄族が一点土器と環濠の壁面に挟まれた状態で出土している。（第35図 図版15・写真①）上層で出土する土器片の大きさは下層ほど大きくなりが、礫は30cmほどのものが3~4個検出されている。

SD01との土層の対応は、SD02の10層や9層がSD01の4層に対応するものと思われる。SD02下層の土器の集中とSD01の3層上面での土器集中が対応するのであろう。SD02下層集中で検出された破片がSD01の出土品である第34図6と接合していることもそれを裏付けるものと思われる。下層集中と実測図との関係は鉄鋤の出土地点周辺に第38図1・8、第39図4、第40図3、第44図12、第45図1

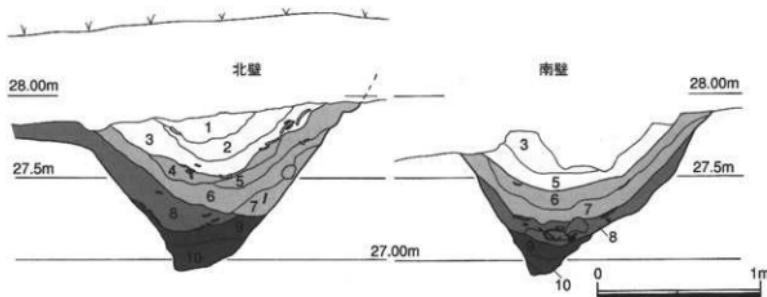


第35図 26区 SD02出土鉄器(1/2)

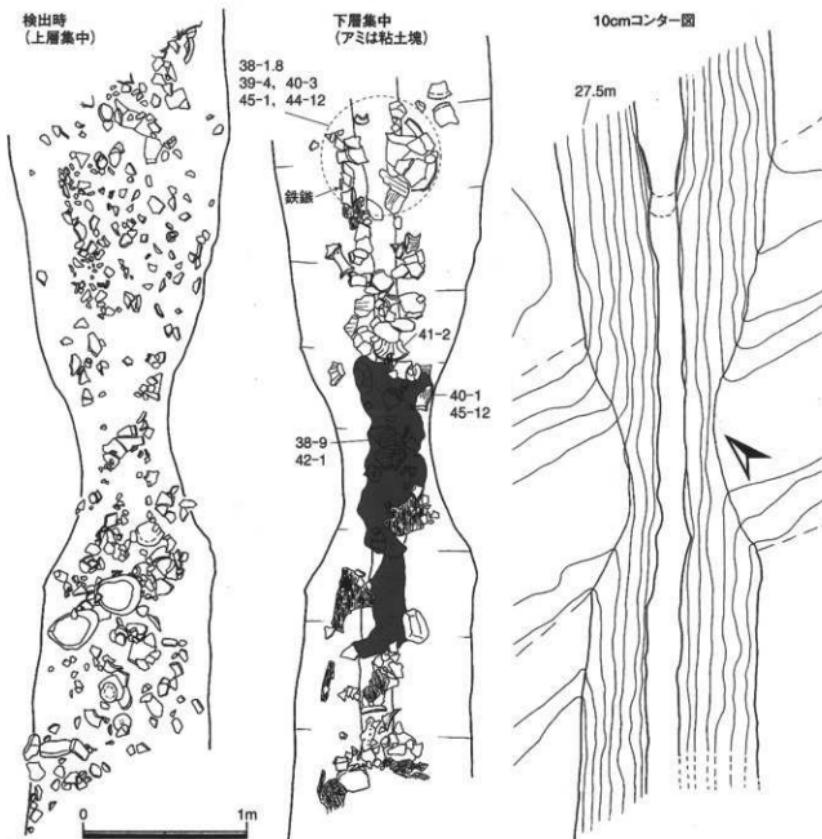


26区 SD02出土の鉄鋤

が、中央の粘土集中地点に第38図9、第41図2、第40図1、第42図1・第45図12がそれぞれ検出されている。またその周辺で粘土塊に入り込むようにして鉄鋤（図版15・左の写真）が出土している。



第36図 26区 SD02セクション(1/30)



第37図 26区 SD02(1/30)

26区 SD02出土土器 (第38~45図 第11~17表 図版26~30)

出土土器は台付き鉢・高坏 (第38図), 複合口縁鉢 (第39図), 鉢 (第40図), 壺 (第41図), 壺 (第42~45図)などがあり, それぞれ器種ごとに紹介していく。

第38図は台付鉢および高坏である。1は長い脚部のつく台付鉢の鉢部である。口縁部は段が付いて外側へ直線的に広がり, 体部は丸みをもっている。4/5程度まで接合復元できた。坏部底面に粘土塊をはめ込んで脚部との接合を行っている。下層集中出土品。2は高坏の坏部片である。丸みのある体部で比較的深みがあり, 口縁部は段を作つて外反する。非常に滑らかな生地である。上層集中出土品。3は段をつけて広がる高坏の口縁部片で, 2よりも上段が長く大きく広がる。上層集中出土品。4は浅い高坏の口縁部片で, 段をつくって広がるが上段は短い。脚部の直径は4cm程度であろう。下層集中出土品。5は高坏脚部片で, 深みのある坏部まで残る。台付鉢とも考えられる。脚部は直径4cm, 直線的な部分の長さ8cm。下層集中出土品。6は高坏脚部片で, 坏底面も残る。脚部は最大で直径5cm, 直線的な部分の長さは8cm。上層集中出土品。7は高坏坏部片で口縁部直径が38cmで大型の部類である。内面には赤色顔料の塗布がみられる。器壁も厚く作られ, 内面の調整はキメの細かい刷毛調整である。外面は粗い目の刷毛調整。上層集中出土品。8は高坏の坏部片で, 直径が17.3cmで小型の部類である。坏部は高さ5.5cm, 脚部の直径は3cm程度であろう。底部内面は窪んでおり, 内面には放射状の刷毛調整にナデ調整が加えられ, 外面はナデ仕上げである。口縁部の広がりは直線的である。下層集中出土品で, 脚部以外は完全な形で残る。9は高坏脚部片で, 据中位に透かし孔が4つ穿孔されている。透かし孔の方向は不定方向であり, 一つの側面から穿孔されている。脚部の直線的な部分の長さは5cm, 直径は4.5cmである。下層集中出土品。10は高坏の脚部片である。脚部直径

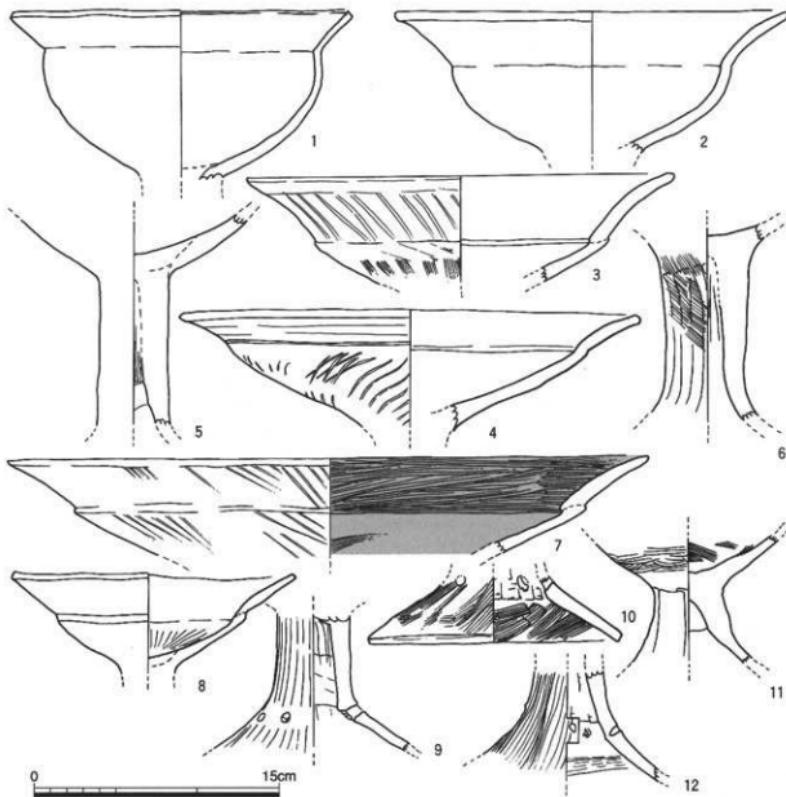
第11表 26区 SD02 出土土器(鉢・高坏)観察表

図 番号	種別	法縁(cm)	技術的特徴	胎土/色調	備考
1	弥生土器 鉢	口縁部直径 20.6 残存高 10.2 脚部最大径 17	外面 上半: 横ナデ 下半: 縦~概位ナデ 上半: 横ナデ 内面 周辺: 細い刷毛 下半: ナデ	角閃石・雪母多い 白色粒子, 赤色砂, 石英 明褐色(Hue7.5YR5/5~5/8) にぶい橙(Hue7.5YR7/3~7/4)	黒斑
	弥生土器 高坏(深い)	口縁部直径 23 残存高 8.5	外面 ナデ	角閃石, 石英, 赤色粒子 浅黄褐色(Hue7.5YR8/4)	
	弥生土器 高坏	口縁部直径 26 残存高 6.5	内面 ナギミ	角閃石, 赤色・白色粒子, 雪母 浅黄褐色(Hue10YR8/4)	
4	弥生土器 高坏	口縁部直径 27.9 残存高 6.5	外面 上半: 横ナデ 下半: 刷毛後ナデ 内面 刷毛後横ナデ	角閃石, 雪母, 白色粒子, 石英 黒(Hue7.5YR2/1) にぶい橙(Hue7.5YR7/3) 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)	非常に なめらかな 生地 内面: 器壁剥落
	弥生土器 高坏(脚部)	残存高 12.8	坏部: ナデ, 横ナデ 脚部: ナデ, 刷毛 内面 ハラ切りとナデ	角閃石, 石英, 白色粒子 橙(Hue5YR6/6)	
6	弥生土器 高坏(脚部)	残存高 11.8	外面 ケズリ後刷毛	角閃石・白色粒子多い, 石英 橙(Hue5YR6/6~6/8)~ 明赤褐色(Hue5YR5/6~5/8)	破れ口腐耗 内面赤色顔料
	弥生土器 高坏	口縁部直径 38.8 残存高 5.8	外面 斜位刷毛 内面 上半: 横刷毛 下半: 横ナデ	角閃石, 赤・白色粒子, 石英 橙(Hue5YR6/6) 明赤褐色(Hue5YR5/8)	
8	弥生土器 高坏	口縁部直径 18 残存高 6	外面 刷毛後ナデ 内面 放射状刷毛後ナデ	角閃石多い, 白色粒子(風化離粒子) にぶい橙(Hue5YR7/3~7/4) 部分的に赤が強く出ている	口縁部に 黒斑
	弥生土器 高坏(脚部)	残存高 8	外面 圓取りしている 内面 ナデ	角閃石多い, 白色粒子 橙(Hue5YR6/6~6/8)	
10	弥生土器 高坏(脚部)	脚部直径 15.2 残存高 4	外面 縫かい刷毛 内面 縫かい刷毛	角閃石, 雪母, 赤砂, 白色粒子, 石英 橙(Hue2.5YR6/6~6/8~7/8)	
	弥生土器 高坏(脚部)	残存高 7	外面 环刷毛 脚部: ケズリ 内面 环刷毛, 脚部: ナデ	角閃石, 雪母, 白色粒子, 石英 橙(Hue5YR6/8)	
12	弥生土器 高坏(脚部)	残存高 6.7	外面 刷毛 内面 上半: ハラ切り, 中位: 横ナデ 下半: 横刷毛	角閃石, 白色粒子, 多い 橙(Hue7.5YR7/6)	黒斑

は15.2cm、高さは3.5cm。透かし孔は等分ではないが4方向から穿孔されている。外面にはキメの細かい刷毛調整が、内面にも同じようにキメの細かい刷毛調整がみられる。脚部内面はヘラ状工具により右回転の断続的な削りが行われる。下層集中出土品。11は高坏の坏部下半から脚部にかけての資料。脚部には直線的な部分を作らず、直径は4.2cmで短い。坏部は深みのあるものに復元でき、脚部裾はそれほど伸びないものと思われる。脚部外面にはヘラ削りを行い、坏部には内外面に横方向の刷毛調整がみられる。上層集中出土品。12は高坏脚部片で、裾部と脚部上半が欠損する。均等ではないが4方向から透かし孔が穿孔されている。しかし、ひとつは貫通しておらず、断面にそれを図示しておく。外面には緩方向の刷毛調整、内面には断続的なヘラ削りがみられる。下層集中出土品。

高坏の胎土では角閃石を含むものが多く、石英が次に多い。また、4区SB01や02の中期の土器に見られたような雲母片を多量に含む土器片はみられない。赤色顔料は7のみに塗布が確認できる。

第39図は複合口縁鉢であり、全体的な器形がわかるものは1～3で、4は上半のみの破片資料である。ほぼ完全な形に接合復元できたのは2である。



第38図 26区 SD02出土土器(高坏1/3)

第12表 26区 SD02 出土土器(複合口縁鉢)観察表

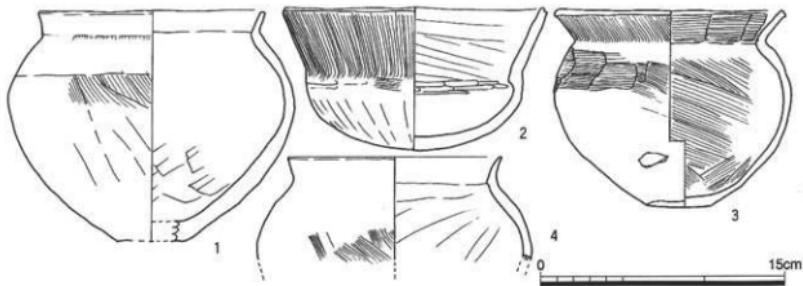
図 番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考	
39	弥生土器 深鉢	口縁部直徑 器高 胴部最大径	13.6 14.1 17.4	外側 口縁部:横ナデ 胴部:刷毛後ナデ 内面 口縁部:横ナデ 胴部:刷毛後ナデ	角閃石、雲母、白色粒子 にぶい黄緑(Hue10YR5/3~5/4)	
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 器高	16.1 8.5	上半:縱刷毛 下半:横ナデ	角閃石多い、雲母、石英、赤色粒子 浅黄緑(Hue10YR8/3~8/4)	
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 (復元径) 器高 胴部最大径	14.2 12 14.5	上半:刷毛、横ナデ 下半:刷毛、長いナデ 内面 刷毛、ナデ	角閃石、雲母、石英、白色粒子 混入多い、 にぶい黄緑(Hue10YR7/3~7/4)	黒斑
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 残存高 胴部最大径	13 6.3 16.8	上半:刷毛後ナデ 下半:刷毛 内面 刷毛後ナデ	角閃石多い、雲母、白色粒子 浅黄緑(Hue7.5YR8/4) にぶい橙(Hue7.5YR7/4)	

1は平底の複合口縁鉢で、口縁部が極端に短い。1／4ほどの破片資料で、復元の口縁部直径は13.6cm、胴部最大径17.4cm、口縁部高さ1.2cm、胴部最大径は中位よりやや上である。下層集中出土品。2は丸底の複合口縁鉢で、口縁部の一部を除きほぼ完全な形に復元できた接合資料。口縁部の高さは3.8cmで全体の高さの半分ほどを占める。口縁部は直線的に広がり、体部は丸みを持っている。器壁位は5~7mmではほぼ均等につくられる。内面は頸部部分にミガキ調整がみられる。頸部の直径は13.2cm。下層集中出土品。3は口縁部の短い体部に深みのある複合口縁鉢である。底部は平底となるがやや丸みをもっている。口縁部の高さ2cm、直径は14.2cm、頸部直径は11.6cm、胴部最大径は中位よりやや上にあり14.5cmである。体部下半に不定形の穿孔がみられる。底部の中心軸と口縁部の中心軸とは1cmほどのズレがある。底部が完全に残る1／3ほどまで接合できた資料である。下層集中出土品。4は複合口縁鉢の口縁部から胴部にかけての資料である。口縁部は短く、高さ1.5cmである。下層集中出土品。1から4の胎土にはいずれも角閃石を多く含む点が特徴である。

第40図は口縁部が直立する鉢で、1と7は平底、他は丸底となり、9は脚部の付く可能性がある。

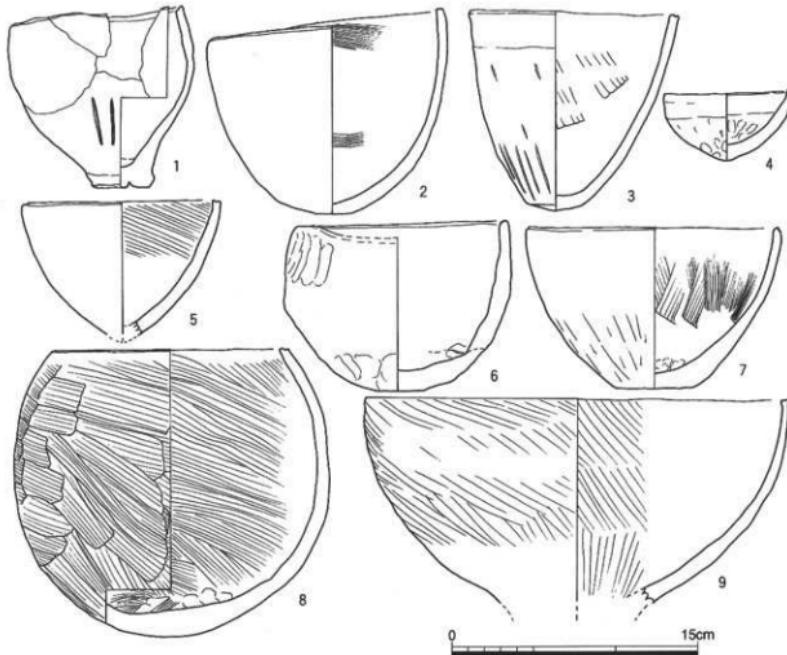
第13表 26区 SD02 出土土器(鉢)観察表

図 番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考	
40	弥生土器 深鉢(小型)	口縁部直徑 器高 坏部深さ	10.5 11.2 9	上半:横ナデ 下半:しぶり込んだようなナデ 指頭によるオサエ	角閃石、雲母、白色粒子、石英粒 混入多い 精製されていない粗い生地	
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 (復元径) 器高	14~ 15 12.5	上半:横ナデ 内面 下半:横ナデ	にぶい黄緑(Hue10YR7/3~6/4) 内面やや明るめ	
	弥生土器 深鉢(小型)	口縁部直徑 器高 坏部深さ	12.75 12.2 11.3	外側 ナデ 内面 上半:刷毛とナデ 下半:ナデ	角閃石多い、白色・石英粒子 混入割合多い 黄緑(Hue10YR8/6), 鞍灰(Hue10YR7/1)	上面観査円
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 器高 坏部深さ	12.75 12.2 11.3	外側 上半:横ナデ 内面 下半:上方にヘラケズリ後横ナデ 下半:刷毛調整後横ナデ	角閃石・雲母多い、赤・白・石英粒子 精製されず混入多い 浅黄緑(Hue10YR8/3~8/4)	黒斑
40	弥生土器 浅鉢(小型)	口縁部直徑 器高 4	7.6 4	内外 口縁部:横ナデ 面 頸部:指頭オサエ	角閃石多い、 橙(Hue5YR5/6~6/8)	
	弥生土器 鉢	L1口縁部直徑 (復元径) 残存高	12 8	外側 ナデ	角閃石多い、白色粒子	
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 器高 10.1~10.4	13 9.8	内面 上半:刷毛 下半:ナデ	浅黄緑(Hue7.5YR8/3~8/6) 内面底部黒斑(5cm位)	
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 器高	15.5 9.8	外側 ナデ仕上げ	赤色粒子(3~5mm)多い、 角閃石、雲母粒子少ない 橙(Hue2.5YR7/8)	
7	弥生土器 鉢	口縁部直徑 胴部最大径	14.3 19.2	内面 ナデ仕上げ	角閃石、雲母・白色粒子 明褐色(Hue7.5YR7/2)~ にぶい橙(Hue7.5YR7/3)	
	弥生土器 鉢	口縁部直徑 (復元径) 胴部最大径	26 12.4	外側 上半:刷毛仕上げ 下半:横ナデ仕上げ	角閃石多い、石英、白色粒子 明褐色(Hue2.5YR5/6)	
	弥生土器 鉢(台付?)	口縁部直徑 (復元径) 残存高	26 12.4	内面 刷毛仕上げ	角閃石多い、雲母、赤・白色粒子 橙(Hue7.5YR7/6)~ 青緑(Hue2.5YR7/8)	内面: やや明るめ



第39図 26区 SD02出土土器(複合口縁鉢1/3)

1は鉢というよりコップ状の器形である。口縁部は傾き、波打っている。器壁は底部が厚めに、体部がもっとも薄く、口縁部で厚めにつくられる。ほぼ完全な形に接合復元できたが、体部上部が打ちかかれている。下層集中出土品。2は丸底となるが接地面はほぼ平らである。口縁部は正円にならず梢円形となり、直径は14~15cmである。器壁は比較的均一につくられ、6~7mmの厚さである。口縁部端部は断面方形で、仕上がりはシャープである。3/4ほどまで接合できた。下層集中出土品。3はほぼ完全な形に接合できたコップ型の鉢である。底面は平底状に角度をつけているが、尖り底となり安定しない。口縁部は断面方形で端部上面に溝があり、仕上がりはシャープである。外面はヘラ削



第40図 26区 SD02出土土器(鉢1/3)

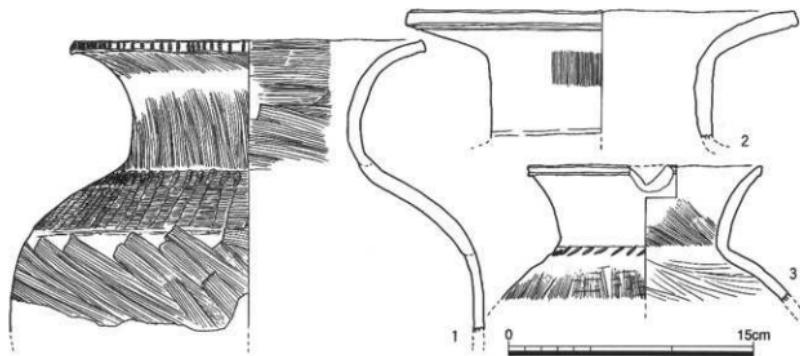
第14表 26区 SD02 出土土器(壺)観察表

図 番号	種別	法量(cm)	技術的特徴	胎土/色調	備考
41 1	弦生土器 壺 (装飾有り)	口縁部直径 残存高	21.6 18 外面 刷毛主体 内面 刷毛工具による装飾有り ナデ	石英・白色粒子主体、赤色砂 にぶい黄橙 (Hue10YR7/3~7/4, 6/3~6/4)	
	弦生土器 壺	口縁部直径 (復元径) 残存高	24 8 外面 上半: 刷毛 + 横ナデ 下半: 刷毛、横ナデ 内面 横ナデ	雲母・石英・白色粒子多い 角閃石 浅黄橙(Hue7.5YR8/3~8/4)	粗い生地
3	弦生土器 壺 (装飾有り)	口縁部直径 残存高	14.6 8.4 外面 上半: 横ナデ 下半: 横刷毛後縱刷毛 内面 刷毛	角閃石、雲母粒、石英、白色粒子 灰黄褐(Hue10YR5.2)	2種の刷毛

りのあとナデ仕上げ、下半に削り工具による縱方向の溝が入る。内面は刷毛調整のあとナデ仕上げ。下層集中出土品。4は下層集中で尖底の壺底部片(第44図13)の中に伏せた状態で出土した小型の浅鉢である。尖底の形態は第44図13と類似しており、形式的に同様と考えられる。外面・内面ともにナデ仕上げである。口縁部には回転を利用した横ナデがみられる。いわゆる手捏ね土器とは違い、口縁部上面はほぼ水平である。下層集中出土品。5は小型の鉢で尖底になると思われる。1/2ほどの接合資料である。口縁部は復元で12cm、残存高は8cm。口縁端部は3と同じ仕上がりである。下層集中出土品。6は丸底の鉢で3/4ほどの接合資料である。口縁部は水平にならず、一方が低くなっている。器壁が厚く、表面の調整も指頭圧痕が随所に残る。内面には粘土紐の接合箇所も残る。胎土には赤色粒子が多く、角閃石や雲母は非常に少ない。下層集中出土品と上層集中出土品の接合品。7はほぼ完全な形に復元できた平底の鉢である。外面には削りと横ナデ、内面にはナデと刷毛調整、そして横ナデが確認できる。下層集中出土品。8は丸底で球形の鉢で、口縁部は大きく内湾する。外面・内面ともに刷毛調整仕上げである。器壁が厚く、底部は2cmとなる部分もある。口縁端部は3・5・7と同様に端部上面に溝をつくる。下層集中出土品。9は半球形の鉢で底部の形態から脚部が付くか、尖底となるかのいずれかであろう。刷毛調整やナデ調整の方向から、内外面ともに3つに調整方向が分けられている。口縁部断面は方形になり、端部上面は溝があり、8と同様に3・5・7の仕上がりに類似する。1~9の胎土には角閃石を多く含むことが共通している。

第41図1~3は壺の口縁部から胴部にかけての資料である。1は口縁部から胴部中位にかけての壺である。胴部より上はほぼ全周するまでに接合している。口縁部直径21.6cm、頸部直径14cm、胴部最大径約29cm。刷毛工具による断続的な施文が口縁端部と肩部に確認できる。とくに肩部の断続的な刷毛調整は、器面調整というより装飾といったほうが良い。口縁端部には刷毛工具により刺みが入る。胎土には石英・白色粒子が主体であり、他の個体と異なる。下層集中出土品。2は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は急な角度で広がっている。口縁部直径24cm、頸部直径13.5cmである。外面の刷毛工具は1cmあたり8本の単位である。口縁部の割れ口と外面・内面に鉄分が沈着している。下層集中出土品。3は壺の口縁部から肩部にかけての破片である。下層集中出土品8点が接合したものである。頸部外面に刻みがみられ、口縁部は一部を焼成後に打ち欠いて「口」をつくっている。胴部内面に刷毛調整が見られる。壺の胎土は1のみが角閃石を含まない。2・3は角閃石を多く含んでいる。

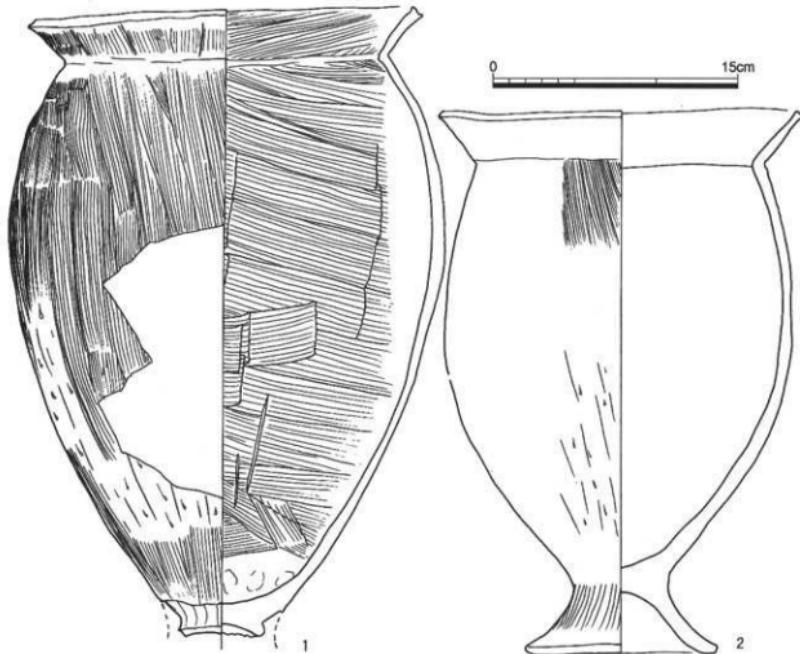
第42図1・2は大型の壺2点である。1は26区SD02で高さ38cm最大の台付壺である。脚部は失われているが、脚台が貼り付けられていた痕跡が残る。脚部も合わせると高さは45cmほどにならうか。内面は断続的な横方向の刷毛調整が、外面には縱方向の刷毛調整。口縁部も同様である。胎土は雲母を多く含み、角閃石が少なく、石英、白色粒子を含む。下層集中出土品と上層集中出土品との接合品で口縁部と胴部の一部の他は全周するまでに接合できた。外面に煤などが付着せず、底部付近に被熱の痕跡がみられないことや器面に剥落のあとがみられないことなどから、煮炊きに利用されてはいない



第41図 26区 SD02出土土器(壺①)

第15表 26区 SD02 出土土器(壺①) 観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法の特徴	胎土/色調	備考
42	1	弥生土器 壺(台付)	口縁部直径 22.9 器高 38	外面 線刷毛 内面 停止ありの横刷毛	角閃石, 青母, 白色粒子, 石英 にぶい種(Hue7.5YR6/4) にぶい種(Hue9.5YR6/3)	
	2	弥生土器 壺(台付)	口縁部直径 22 器高 33.1	外面 上半: 横ナデ, 刷毛調整 下半: 脊方向ハラズり, ナデ 内面 上半: 横ナデ 下半: ナデ	角閃石多い, 青母, 赤・白色粒子 にぶい種(Hue5YR6/4) 外面: 上半に黒褐(Hue5YR3/1)	スヌ付着



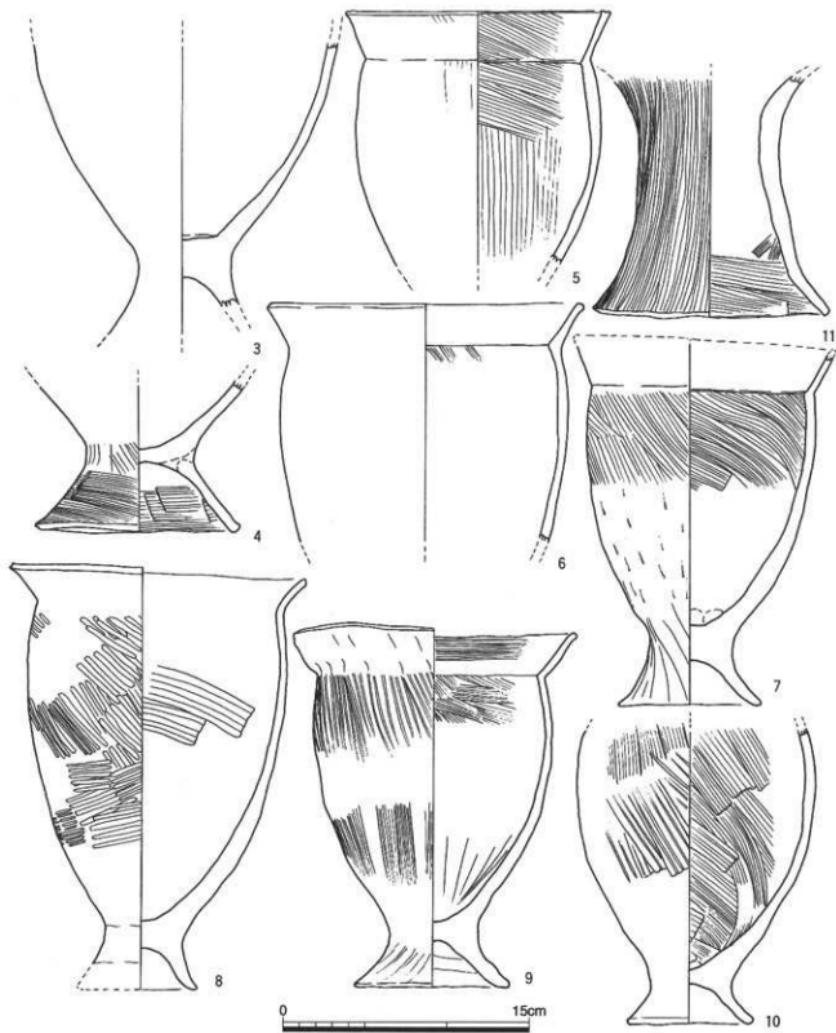
第42図 26区 SD02出土土器(壺①/3)

第16表 26区SD02 出土土器(甕②③)観察表

図 番号	種別	法量(cm)	接法的特徴	胎土/色調	備考
3	弥生土器 甕(台付)	胴部最大径 18.8 残存高 16	外面 刷毛後ナデ 内面 刷毛後ナデ	角閃石・安山岩白色粒子多い 橙(Hue2.5YR6/8) 内面:黒褐色(Hue7.5YR3/1)	
4	弥生土器 甕(脚部)	底径 12.2 残存高 9	外面 ナデ	雲母粒子、白色粒子(風化礫粒子)多い 橙(Hue2.5YR7/6)	
			内面 刷毛後ナデ	にぶい橙(Hue7.5YR7/3)	
5	弥生土器 甕(台付) (小型)	口縁部直径 16 残存高 15.5	外面 刷毛 内面 刷毛	角閃石・白・赤・白色粒子多い 褐色(Hue7.5YR4/1) 内面:にぶい褐色(Hue7.5YR5/3~5/4)	黒斑
6	弥生土器 甕(脚部)	口縁部直径 19 残存高 19.5	口縁部:横ナデ 脚部:刷毛 内面 刷毛	角閃石・白色粒子多い にぶい黄橙(Hue10YR7/4) 内面:にぶい黄橙(Hue10YR6/3)	
7	弥生土器 甕(小型)	復元高 22.2	口縁部:横ナデ 外面 脇部:刷毛、ケズリ 内面 ナデ	角閃石多い、石英・赤・白色粒子 にぶい黄橙(Hue10YR6/3)	黒斑 スヌ付着
8	弥生土器 甕(小型)	口縁部直径 18.1 器高 25~25.9	上半:スヌ付着 下半:タクタキ	角閃石多い、赤砂粒子、白色粒子 にぶい赤褐色(Hue2.5YR5/4)	
			内面 上半:ナデ、部分的に刷毛	内面:にぶい橙(Hue7.5YR6/4)	
9	弥生土器 甕(小型)	口縁部直径16.2~ (楕円形) 17.5 器高 21.2~22.2	上半:横刷毛 内面 下半:瓶刷毛	角閃石多い、石英、白色粒子、赤砂粒子 にぶい橙(Hue7.5YR6/4)~ にぶい褐色(Hue7.5YR5/3~5/4)	被熱の為 表面剥離 スヌ付着
			外面 刷毛仕上げ		
10	弥生土器 甕(小型)	残存高 17.8	上半:斜位刷毛 外面 下半:刷毛後ナデ 内面 脇部:横ナデ	角閃石多い、白色粒子(風化礫粒子) 外面:橙(Hue2.5YR7/6) 内面:橙(Hue7.5YR6/6)	
			外面 斜位刷毛、台部:横ナデ		
11	弥生土器 器台	残存高 14.7	外面 縦刷毛 内面	角閃石・石英多い、白色粒子 橙(Hue2.5YR6/6~6/8)	
			上半:縱方向のナデ 下半:横刷毛		
12	弥生土器 甕(大型) (平底)	残存高 29.5 底径 9	全周:縦刷毛 内面 刷毛、ナデ	角閃石多い、白色粒子、赤色砂小礫 浅黄橙(Hue7.5YR8/3~8/5) にぶい橙(Hue7.5YR7/3)	
13	弥生土器 甕	残存高 9.2	上半:ナデ 外面 下半:ケズリ 内面 縦刷毛	角閃石、白色粒子、赤色砂粒 橙(Hue7.5YR7/6) 黄橙(Hue7.5YR7/8)	

いようだ。2は高さ33.2cmの台付甕である。脚部から胴部下半まで良好に残っており、胴部中位から上は半分ほどが残る。中位外面には煤の付着があり、煮炊きに利用されたようだ。脚部裾の開きが強く、胴部が張り、頸部がすぼまり、口縁部で再び開く。口縁部直径と胴部最大径とはほぼ同じとなる。胴部外面は上位が縱方向の刷毛調整、下半は縱方向のヘラ削りとなる。下層集中出土品。

第43図3~10は台付甕、11は器台である。3は台付甕の胴部下半から脚部にかけての破片資料である。脚部裾は失われており、胴部は赤く変色する部分がある。外面ともに刷毛調整のあとにナデ調整が加えられている。下層集中出土品。4は台付甕の脚部である。脚部裾は直線的に広がり、裾部直径は12.2cmである。脚部の調整は刷毛による。胎土には角閃石を含まず、雲母粒子が少々、風化礫が多く混入する。下層集中出土品。5は台付甕の口縁部から胴部にかけての破片で、1/3周ほどの接合資料である。頸部のしまりがゆるく口縁部が直立する小型の台付甕と思われる。頸部内面にはしっかりと稜線をつくる。内面に縱方向の刷毛調整がみられる。胴部下半は失われている。下層集中出土品。6は台付甕の口縁から胴部にかけての破片である。頸部内面にはしっかりと稜線をつくる。胴部中位より下は失われている。下層集中出土品。7は小型の台付甕で、口縁部以外はほぼ完全な形にまで接合できた。頸部内面は稜線をしっかりとつくる。胴部下半には縦方向のヘラ削りが、上半は刷毛調整が、口縁部はナデ調整である。内面は胴部上半が刷毛調整、下半がナデ調整となる。脚部外面には絞りこむようなナデがみられる。脚部裾の直径は8.6cmである。下層集中出土品と上層集中出土品との接合資料。8は小型の台付甕ではほぼ8割方まで接合している。外面上半に煤の付着があり、脚部は赤化し劣化している。頸部内面には稜線をつくらない。全体的にナデ仕上げであるが、外面には叩き



第43図 26区 SD02出土土器(斐②1/3)

痕が残り、内面には部分的にヘラ調整痕が残る。胴部片・口縁部片とともに劣化しもろくなっている。下層集中出土品と上層集中出土品の接合品。9は小型の台付甕で、ほぼ完全な形（9割）にまで接合している。頸部内面に稜線をしっかりとついている。胴部外面下半は器面が表面のみ薄く剥離しており、煤が付着し黒ずんでいる。内外面ともに刷毛調整仕上げである。上層集中出土品と下層集中出土品との接合品。10は小型の台付甕の胴部以下の破片で、欠けている部位以外は全周する。張りのある

胸部で、脚部がやや小さめである。3~10までの壺胸部には煤の付着や、被熱による劣化などが確認できた。また、4以外は角閃石を多く含む胎土が特徴であり、在地産の煮炊きに利用された壺の典型的なものと考えられる。第41図2も煮炊きに利用された可能性があり、それを合わせると日常的な壺として大型の中型のものと小型のものと大きさにバリエーションがあり、もっとも利用されていたものは小型のもので出土数も多いものと思われる。

11は筒型の土製器台である。上部を失うが7割方まで接合できた。外面は縦方向の刷毛調整で、内面は横方向の刷毛調整と縦方向のナデ調整である。残存高14.5cm。下層集中出土品。

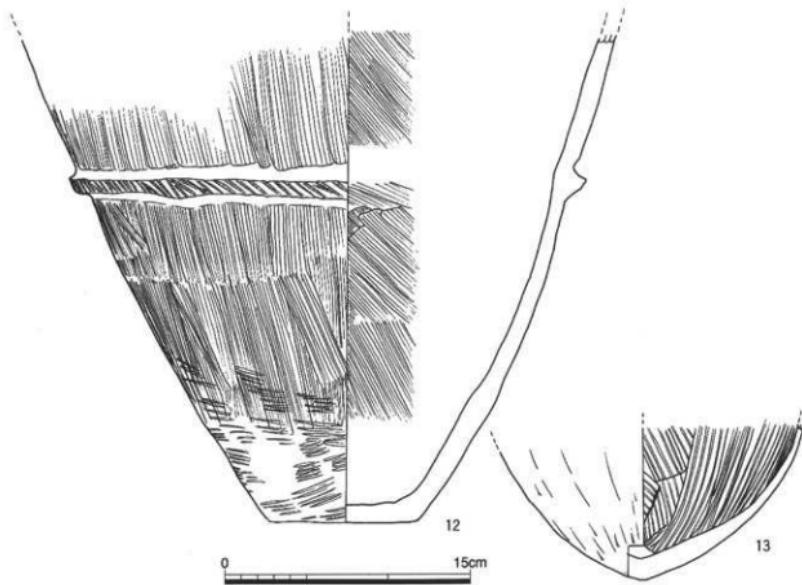
第44図12・13は台付壺以外の壺である。12は大型の壺で平底となり、胸部に一条の断面台径の突帯をめぐらす。突帯上面にはヘラ工具による施文がみられる。胸部外面の底部近くには叩き調整痕がありそのあとに縦方向の刷毛調整がみられる。突帯の貼り付けは刷毛調整後である。内面の刷毛調整も突帯の部分のみナデ消されており、突帯の貼り付けにより消えたものであろう。器壁は1cmほどで均等に作られており、底部は平底となるが焼け歪みがみられ、完全な平底ではない。下層集中出土品。

13は壺の底部片もしくは鉢の底部片と思われる。尖底であり、外面は縦方向のヘラ削り、内面は縦方向のナデ調整である。底部は厚くつくられ、胴部にかけて薄くつくられている。下層集中出土品で底を下にした状態で出土し、その上に第40図4が伏せた状態で密着していた。

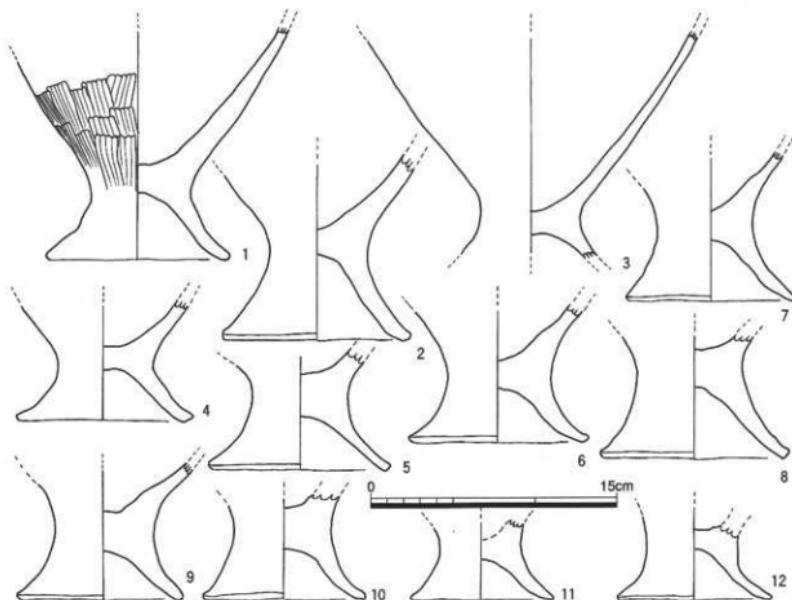
第45図1~12は台付壺の脚部片ばかりを集めめてみた。胎土にはすべてで角閃石を含んでいる。裾部直径の大きい順に並べてきたが、やはり三種類くらいのおおきさに分類できそうである。

第17表 26区 SD02 出土土器（台付壺脚部）観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考
1	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	11 14	外面 縦刷毛 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 石英, 白色粒子 外面: にぶい黄橙(Hue10YR7/4) 内面: 灰褐(Hue10YR5/2)	
2	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	11.6 11.2	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 石英, 赤・白・黒色粒子 外面, 底部内面: 明黄褐(Hue10YR7/ 6)~燈(Hue5YR6/8) 内面: 灰褐(Hue7.5YR6/2)	スス付着
3	弥生土器 壺(台付) (脚部)	残存高	13	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 石英 外面: 橙(Hue2.5YR6/8) 内面: 黑(Hue7.5YR2/1)	
4	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	11 8.2	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 白色粒子 外面: 橙(Hue2.5YR6/6) 内面: 灰褐(Hue7.5YR6/6)	
5	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	11.1 7.3	外面 横刷毛+ナデ 内面 刷毛後ナデ	角閃石, 石英, 白色粒子 燈(Hue7.5YR7/6)~明赤褐(Hue2.5 YR5/6) 一部褐灰(Hue7.5YR4/1)	
6	弥生土器 壺(台付) (脚部)	復元裾部直徑 残存高	10 8.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 石英 にぶい黄橙(Hue10YR6/4)	
7	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	10.3 9.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 白色粒子 にぶい黄橙(Hue10YR6/4)~ にぶい赤褐(Hue5YR5/4)	
8	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	11.6 8	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 砂粒多い にぶい黄橙(Hue10YR6/4)	
9	弥生土器 壺(台付) (脚部)	残存高	8.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 石英 にぶい橙(Hue7.5YR6/4)	
10	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	10 6.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 石英, 赤・白・黒色粒子 外面: 橙(Hue7.5YR6/6)~黄褐(Hue 2.5YR5/3) 内面: 灰褐(Hue7.5YR4/2)	
11	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	8.5 5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 霧母, 白色粒子, 石英 明赤褐(Hue5YR5/6)	
12	弥生土器 壺(台付) (脚部)	裾部直徑 残存高	9.4 5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石, 石英, 黒・赤・白色粒子 橙(Hue7.5YR6/6)~赤(Hue10R5/8)	



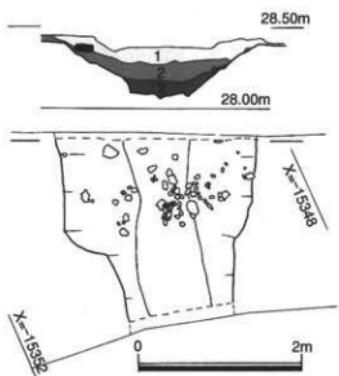
第44図 26区 SD02出土土器(甕③1/3)



第45図 26区 SD02出土土器(甕1/3)

12区 SD03 (第46図 図版16)

南北に細長い12区では、前年度報告した古代の溝であるSD01と中近世の溝であるSD02とが南北方向の長い溝が検出されている。それらに切られる形となるが、東西方向にSD03が検出できた。他の弥生時代の遺構からは離れており、それらとの距離関係は26区SD01との直線距離は約30m、23区SD01との直線距離は約30m、32区SB01との曲線距離は約85mである。検出できた環濠は検出面の幅で約2.5m、深さは60cm、底面の幅は70~80cmである。主軸方向は真東から18度南に傾き、底面はほぼ直線的に掘削されており、26区SD01・02と違い比較的直線的な構造と思われる。覆土は灰褐色土層（1層）があり、その下に黄褐色土粒子を含む黒褐色粘質土層（2層）、最下層には黄褐色粘質土層（3層）が堆積している。遺物は1層中に含まれており、平面図に固化している土器片は1層中のもの。最下層からは弥生土器片の出土はみられなかった。出土遺物には26区SD01・02で検出された土器に形態的に類似し、同時に存在したものかそれ以降の環濠である可能性が高い。出土遺物は洗浄作業などが終了していないため、今回は報告できない。



第46図 12区 SD03(1/60)



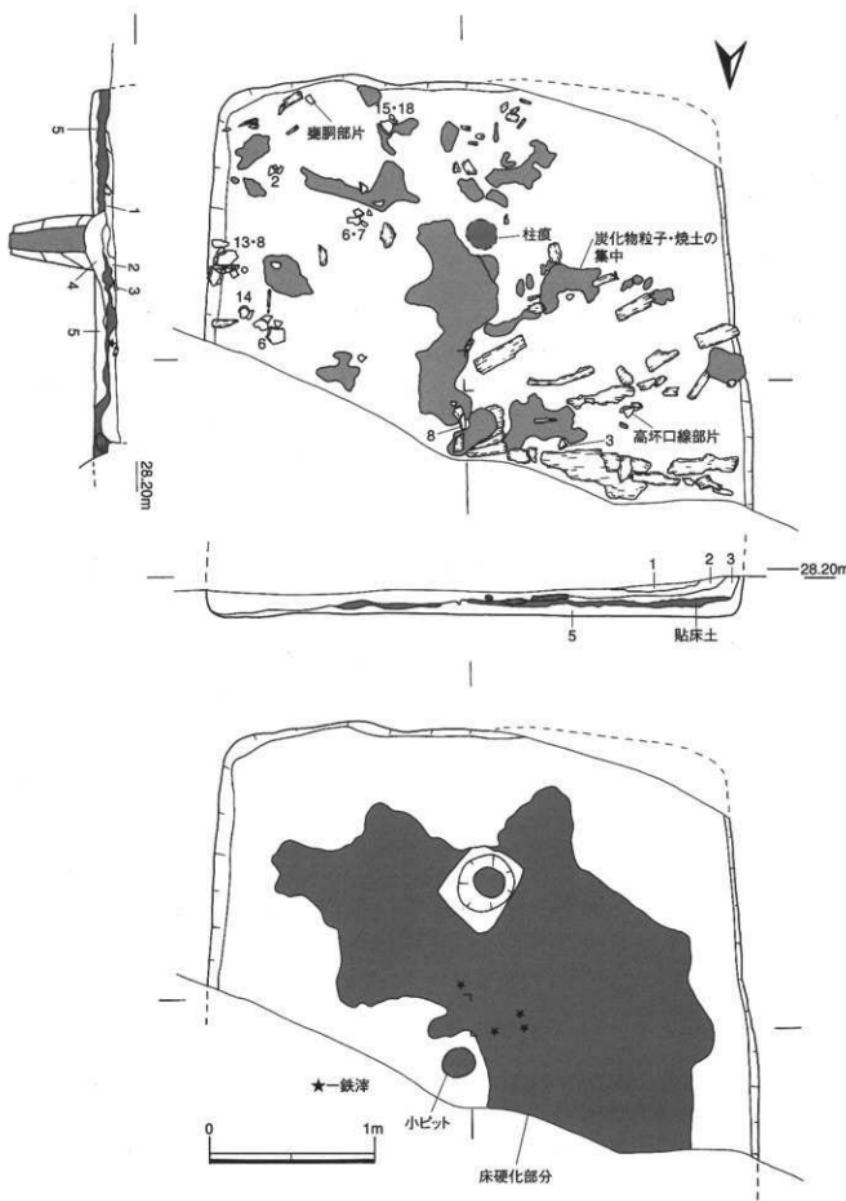
12区 SD03検出状況

住居跡 (第47~55図 図版5・6・16~19)

弥生時代後期から古墳時代にかけての建物跡が26区から29区にかけて検出されている。27区では方形の竪穴住居跡のおよそ半分が検出されている。その西側ではややいびつとなるが掘立柱建物が検出され一つの柱穴には27区SB01覆土に含まれていたものに類似する形態の土器片が投げ込まれていた。29区では方形の竪穴住居跡が検出され、その東側で土坑（29区SX01）、住居跡に切られるものとして29区SK02が検出されている。29区SK01は土坑として取り扱っていたが、調査中にかく乱であることが判明したので欠番としている。また、27区SB01のすぐ東で長方形の土坑墓（27区SK01）が検出されている。出土遺物により時期が判明しているのは27区SB01・SB02、29区SB02・SX01であり、27区SK01は所属時代不明で、29区SK02は29区SB01以前となる。以下、個別に紹介していく。

27区 SB01 (第47図 図版5・6・16~17)

26区から29区かけては中近世・近代まで東西方向に水路が掘削されており、検出されたほとんどの遺構がこの水路に切られた状態で残存していた。この住居跡も同じように北側が水路により失われており、北辺を除く三辺が検出できた長方形となる竪穴住居跡である。主軸はほぼ真北に合わせており、



第47図 27区 SB01遺物出土状況・床面検出状況(1/30)

弥生時代後期の環濠と住居跡

東西約3.4m、南北3m以上の規模となる。壁の立ち上がりはほぼ垂直となり、25~10cmが残存する。柱穴は南壁中央から約96cmの位置に円形のものがあり、その対となるものは調査区内では検出されなかつた。そのため二本を主柱とする構造の南北方向に長い方形の平面プランに復元できる。柱痕跡のほかにピットが調査区北側よりの中央で確認できた。床面は貼り床として黒褐色粘質土と黄褐色粘質土との混入土を敷き詰めている。そのおよその範囲は第47図下に示している。床面のレベルはおよそ28.00m付近にある。これがおよその竪穴住居跡の状況である。

竪穴住居跡の検出は重機による表土掘削段階にできた。調査区内では後世に畠地の造成などによる土地改良により、遺物包含層や遺構面の削平が進んでいた。今回の住居の検出面は現状の道路表面から浅い位置にあり、住居跡壁面が10cm程度しか確認できないこともその影響が考えられる。

覆土中には炭化材が多数検出され、平面的には北西部に集中している。壁よりではなく中央にまで横たわる炭化材がある。小さい炭化材は住居跡全面に広がるが、北西部分を中心に1m近くのものも横たわっている。検出された炭化材は直径10~15cmの自然木を利用した部材がほとんどである。西壁に小口が密着するように横たわる部材もみられる。炭化材の分布と焼土の分布とは重なる部分が多い。薙状の炭化材も南東部分で確認できた。炭化木の小口の切断には、鋸などによる平面的な仕上がりは確認されず、丸く尖り気味である。検出された炭化材の数量は一軒の住居すべての構造材をまかなくとは考えられない。そのため火災家屋とは考えられず、その分布の偏りから竪穴住居の廃棄のなかで北西側に不要な部材を集め燃したものと考えられる。

柱穴は南辺中央から約90cmに柱芯が位置し、柱材の直径は柱痕跡から約15cmで、掘り方は直径約30cmの円形である。床面から柱痕底面までの深さは約55cmである。土層観察から柱は住居廃棄とともに地中部分より上が抜き取られており、その柱の抜き取り穴は不正方形となる。柱痕跡の断面観察では残された部分の柱材は埋没後に腐食したものと思われ、調査時にはすでに土壌化していた。

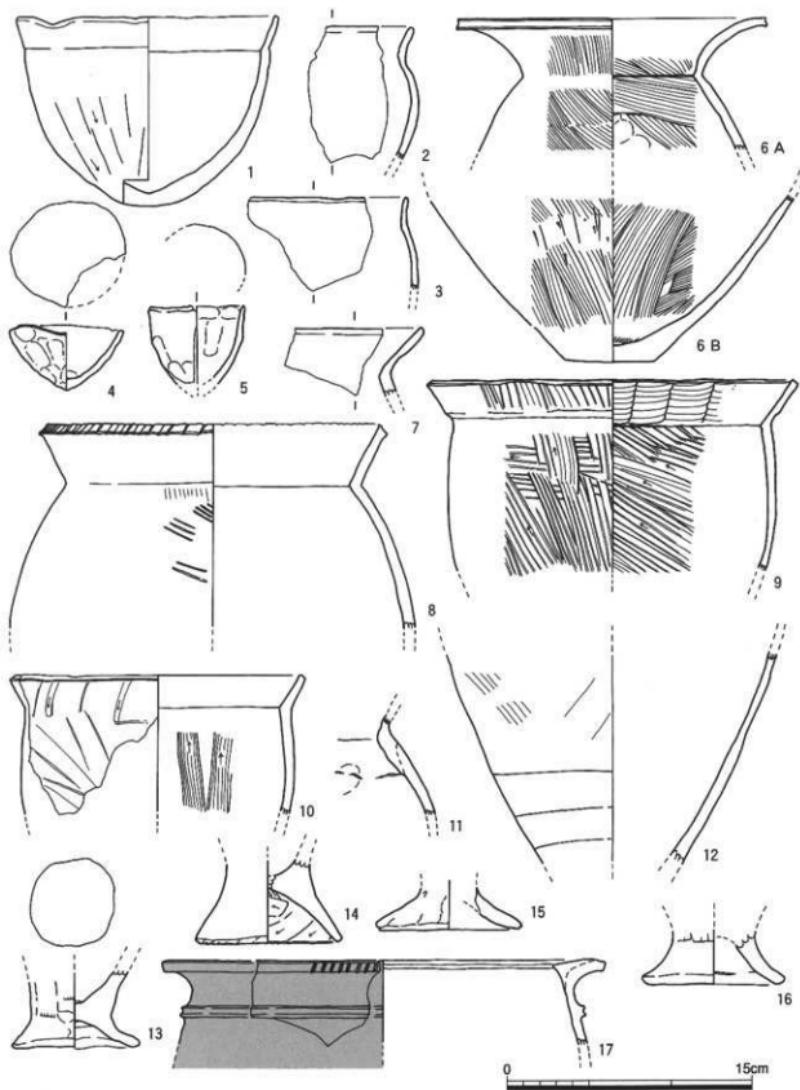
ピットは柱穴から北へ約1.1mに位置し、ほぼ円形で直径は約18cm、ゆるい掘り鉢状の底面となる。焼土塊や還元した面は確認されなかった。周辺の硬化面直上で鉄滓(第47図下★)が4点出土している。

遺物の出土状態は炭化材の検出に伴って土器片が検出された。最大10cm程度の破片資料が多く、完全な形での土器の出土はなく、完全な形になるまで復元できる土器片もなかった。炭化材の取り上げ後、床面の検出に伴う土器は最大3cmの大の中破片となっており、磨耗が激しく、器種同定が難しい。床面直上の資料はみられなかった。第48図にあげた実測図は炭化材検出時に伴う破片資料である。弥生時代中期の赤色顔料が塗布された壺の口縁部片(第48図17)や弥生時代後期の壺の口縁部片などが混在している。いずれも竪穴住居跡の埋め戻しに利用された土砂の中に混在していたものであろう。

炭化材や住居跡内部の土層堆積の観察などから、当住居跡は上屋構造を解体し、柱は地上に出ている部分を抜き取り、屋根材などの廃材を北西部分に投げ込み、火を放ち、十分焼けた後に、土器片を含んだ土砂をかぶせ埋めたものと考えられる。

27区 SB01出土土器(第48図 図版31)

1は鉢で五割方まで接合できた資料である。口縁部は短く、胴部は丸みを持っており、底面は丸底である。底部内面は尖底状にくぼんでいる。前面磨耗がみられ、割れ口も磨耗している。2は小型の鉢の口縁部片である。体部は丸みをもち、口縁部が短い。3は小型の鉢の口縁部片である。口縁部が短く、胴部最大径が口縁部直径より大きくなる。4・5は手捏ねの鉢である。いずれも底面は尖底となる。内外面には指頭圧痕が明瞭に残り、器壁は薄く焼成も良好である。6は壺の口縁部から肩部にかけての破片(6A)と、その底部片(6B)である。胴部を尖うが同一個体である。口縁部の開きは大きく頸部の縮まりは強い。底面は平底となり、外面はヘラ削りのあと刷毛調整が行われている。



第48図 27区 SB01出土土器(1/3)

割れ口や表面の磨耗がほとんどみられない。7は台付壺の口縁部片で、端部がまるくつくられ、稜線なども強調されない。割れ口は磨耗している。8は口縁部に刻みの装飾をもつ壺で、平底と思われる。1／5周するまで接合できた。外面に煤が厚く付着し、叩き痕跡がみられるが判読が難しい。9は台

付壺の口縁部から胴部中位にかけての資料である。内外面に刷毛調整がみられ、口縁部内面にある断続的な刷毛調整や内外面の刷毛調整などが、26区SD02出土の壺（第42図1）に類似している。頸部内面の稜線はしっかりとついている。器面や割れ口に磨耗はみられない。10は小型の壺の口縁部から胴部にかけての破片である。割れ口は磨耗している。鉢の口縁部とも考えられる。11は壺の口縁部片である。内面には粘土紐の継ぎ目を残す。12は台付壺の胴部片である。下半の器面は赤化し、劣化している。13～16は台付壺の脚台部分である。13はもっとも脚高が低いもので脚部直径は5cmである。全体的に磨耗が激しい。14は脚高が4cm程度で高く、脚部直径は5cmである。割れ口などには磨耗がみられない。15は脚裾部の資料で裾部直径は9cmである。全体的に磨耗がみられない。16も脚部裾の資料であり、直径は9cmである。割れ口も磨耗している。17は壺の口縁部片で外面に赤色顔料が塗布

第18表 27区 SB01 出土土器 観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技術的特徴	胎土/色調	備考
1	弥生土器 鉢	口縁部直径 (復元径) 高さ	16.0 11.6	外面 下半にケズリを残し、 上半はナデ仕上げ	角閃石、白色粒子(2~4mm) 赤色粒子(2~3mm)	焼成良好 全面磨耗
				内面 ナデ仕上げ	灰黄褐(Hue10YR6/2)~ にぶい黄橙(Hue10YR7/3)	内部:黒斑 有り
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英、雲母	破れ口磨耗
2	弥生土器 鉢(小型)			内面 ナデ仕上げ	内面:黒褐(Hue7.5YR3/1) 外縁:灰褐(Hue7.5YR6/2)	
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英	
				内面 ナデ仕上げ	橙(Hue5YR6/6)	
3	弥生土器 鉢(小型)	口縁部直径15.0~ (復元径) 手捏ね土器 鉢	13.0 6.4~ 6.9 4.0	外面 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英、雲母	
				内面 ナデ仕上げ	内面 ナデ仕上げ	
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英	
4	手捏ね土器 鉢	口縁部直径 (復元径) 高さ	18.9 5.0~ 6.0 5.0	外面 指顎オサエ	角閃石、雲母粒子、白色粒子、石英 浅黄橙(Hue10YR8/3)	外底黒斑 口縫一部スス
				内面 ナデ	角閃石、白色粒子、赤色砂 橙(Hue7.5YR7/6)~ 明褐(Hue7.5YR5/6)	外縁黒斑
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英、雲母	
5	手捏ね土器 鉢	口縁部直径 (復元径) 高さ	21.2 5.0~ 6.0 5.0	内面 指顎オサエ	角閃石、白色粒子、赤色砂 橙(Hue7.5YR7/6)~ 明褐(Hue7.5YR5/6)	
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英、雲母	
				内面 ナデ仕上げ	内面 ナデ仕上げ	
6	弥生土器 壺	口縁部直径 (復元径)	18.9	口唇部:横ナデ	角閃石、雲母片、白色粒子	
				外面 頸部~肩部:刷毛調整	内面:黒(Hue7.5YR2/1~1.7/1)	破れ口 はっきりし、 磨耗少ない
				腹下部:ケズリ後刷毛調整	外縁:にぶい褐色(Hue7.5YR6/3~5/3)	
7	弥生土器 壺(台付)			内面 全体的に斜め方向の刷毛調整	角閃石、白色粒子、石英	
				外縁 ナデ仕上げ	雲灰(Hue7.5YR4/2)	破れ口磨耗
				内面 ナデ仕上げ	内面 ナデ仕上げ	
8	弥生土器 壺	口縁部直径 (復元径)	22.6	外面 刷毛とタタキ痕	角閃石多い、白色粒子、雲母、石英	焼成良好 ふきこぼれ のおこげ有り
				内面 全体的にナデ調整	にぶい橙(Hue7.5YR7/4)~ 橙(Hue7.5YR7/6~6/6)	
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英	
9	弥生土器 壺	口縁部直径 (復元径)	18.0	外面 斜め方向主体の刷毛調整	角閃石多い、白色粒子、雲母	焼成良好
				内面 脚部:斜方向の刷毛	にぶい黄橙(Hue10YR7/2~7/4)	黒斑
				内面 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、雲母片、石英	破れ口磨耗
10	弥生土器 小型の壺	口縁部直径 (復元径)	9.0	外面 刷毛調整	角閃石、雲母、石英	焼成良好
				内面 刷毛調整	明黄橙(Hue10YR6/6)~ にぶい黄橙(Hue10YR7/4)	全面磨耗
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、石英	
11	弥生土器 壺			内面 刷毛後ナデ	内面:橙(Hue5YR7/8)	
				外縁 刷毛後ナデ	外縁:浅黄橙(Hue7.5YR8/3)	
				内面 ナデ仕上げ	角閃石、石英、白色粒子	
12	弥生土器 鉢(台付)			外縁 刷毛後ナデ	角閃石、橙(Hue5YR6/6~6/8)	外縁:底部 近く 横ナデ
				内面 ナデ仕上げ	角閃石、石英、白色粒子	
				外縁 刷毛後ナデ	黒斑有り	
13	弥生土器 壺(台付)	台幅直径	8.0	外面 ナデ仕上げ	角閃石多い、雲母、石英	焼成良好
				内面 ナデ仕上げ	浅黄橙(Hue10YR8/4)~ 黄橙(Hue10YR8/6)	黒斑
				外縁 ナデ仕上げ	角閃石、白色粒子、赤色砂、雲母	
14	弥生土器 壺(台付)	台幅直径 (復元径)	9.0	外面 ナデ仕上げ	内面:橙(Hue5YR6/6)~ 明赤褐(Hue5YR5/6)	焼成良好
				内面 ナデ仕上げ	角閃石、雲母、白色粒子	赤く仕上がる 胎土
				外縁 ナデ仕上げ	明赤褐(Hue2.5YR5/6~5/8)	
15	弥生土器 鉢(台付)	台幅直径 (復元径)	9.0	外面 基部の刷毛調整	角閃石多い、白色粒子、石英、雲母	焼成良好
				内面 ナデ仕上げ	橙(Hue5YR7/6~6/6)	全面磨耗
				内面 ナデ仕上げ	角閃石、雲母、白色粒子	
16	弥生土器 壺(台付)	台幅直径 (復元径)	9.0	外面 基部の刷毛調整	角閃石多い、白色粒子、石英、雲母	焼成良好
				内面 脚部は横ナデ	橙(Hue5YR7/6~6/6)	全面磨耗
				内面 ナデ仕上げ	角閃石、雲母、白色粒子	
17	弥生土器 壺	口縁部直径 (復元径)	27.0	外面 ナデ仕上げ	雲母、赤色砂、白色粒子、 角閃石少量で粒子が小さい	焼成良好
				内面 ナデ仕上げ	橙(Hue2.5YR6/6)~ 明赤褐(Hue2.5YR5/6)	全面磨耗
				外縁 ナデ仕上げ	赤色顔料	外縁:赤色 顔料

されている。口縁部直径は27cm、断面「M」字の突帯が貼り付けられている。4区SB02や23区SD01などで出土している須玖式の壺と類似する。出土土器の形態的な特徴は26区SD01・02出土品(第32~34・38~45図)と類似する点が多い。

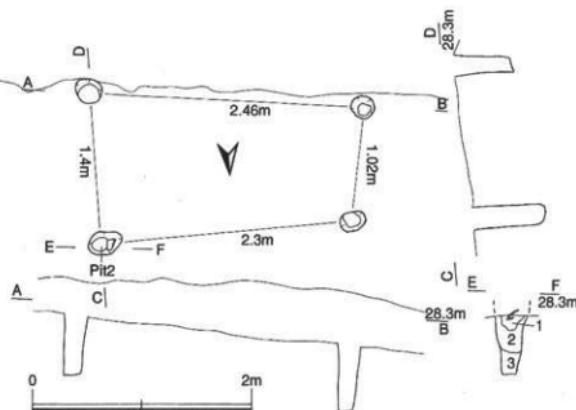
27区 SB02

(第49~50図 図版17・31)

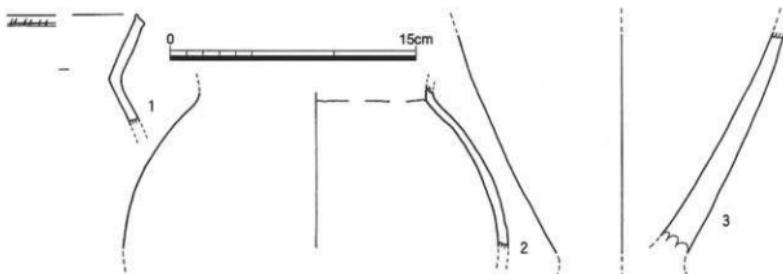
27区SB01の西側で検出された掘立柱建物である。平面プランは不正方形であるが、柱掘り方の規模や深さなどが類似するため、掘立柱建物としている。主軸は東西方向にある。北東隅の柱の抜き取り穴に、第50図に図化した土器片が投げ込まれていた。

27区 SB02出土土器 (第50図 図版31)

1は壺の口縁部から頸部までの破片で、口縁部外面に刻みが施されている。端部のつくりがシャープであり、刻みは上半が横ナデ調整により消されている。肩部外面には刷毛調整がみられる。割れ口



第49図 27区 SB02平面図・セクション図(1/50)

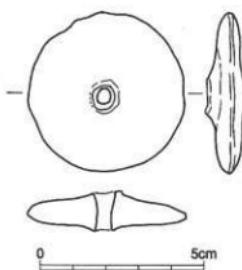


第50図 27区 SB02(pit 2)出土土器(1/3)

第19表 27区 SB02 出土土器観察表

図 番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考
50 1	弥生土器 壺(台付)	6.7	外面ナデ	角閃石、雲母、白色粒子 灰褐(Hue5YR4/2)~	
			内面ナデ	褐色(Hue5YR4/1)	
2	弥生土器 壺	9.8	外面ナデ	角閃石、白色粒子、石英、雲母、赤色砂	おこげ付
			内面刷毛後ナデ	浅黄橙(Hue10YR8/4)	
3	弥生土器 壺(台付)	13.4	外面細い刷毛、ナデ	角閃石・白色粒子・石英・雲母多い 橙(Hue5YR6/6)	
			内面ナデ		

や器面には磨耗の少ない資料である。27区 SB01出土の甕（第48図8）と同一個体であろうか、類似する点が多い。2は甕の頸部から胴部にかけての破片資料である。頸部内面の稜線ははっきりつくらない。内外面ともにナデ調整仕上げである。外面に煤が付着している。27区 SB01出土品中に類似する破片がみられ、同一個体と思われる。3は台付甕の胴部下半の破片資料である。器壁が非常に厚く



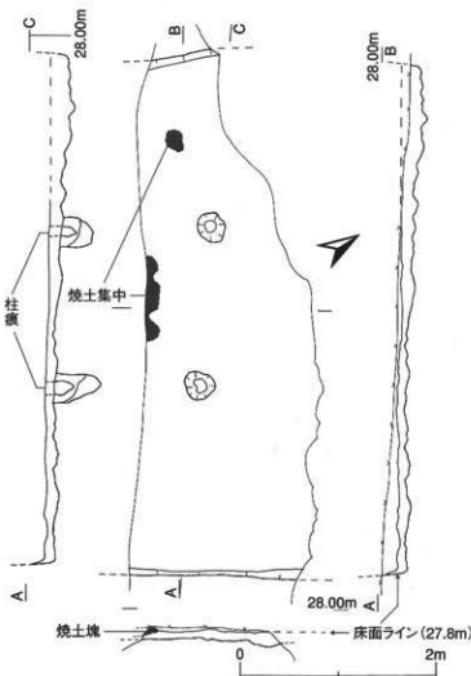
第51図 29区 SB02出土品(2/3)

つくられている。器面は赤化し劣化している。出土品には27区 SB01と共通する部分が多く、同一個体と思われるものもある。SB02の柱抜き取り穴に投げ込まれた土砂とSB01を埋めた土砂には共通する点が多く、同一時期に建物が解体された可能性が高い。

29区 SB02 (第51・52図 図版17-18・31)

29区は十箇遺跡の範囲の中でも西端にあたり、土黒川に面する部分にあたる。(第2・15図)この調査区のもっとも西端で方形の竪穴住居跡1軒が確認できた。この地点で平坦面はおわり、なだらかに土黒川に下っていく地点である。平面形は方形で東西二辺の一部分が検出できた。内部は床面と2つの柱穴、そして炉が検出できた。壁面の立ち上がりはほぼ垂直であるが、検出面から

の深さがそれほどなく、後世にかなり削平されているものと思われる。東西方向で長さは5.2mで、柱穴は中央の炉を囲むように検出された。東壁から1.9m、西壁から1.8mの位置に柱穴がそれぞれあり、その中央に炉の端が検出できた。炉を中心とすると方形の対角線上に柱は位置するものと思われる。調査区南側に炉の中心があり、対角線上に対になる柱穴が存在するものと思われる。柱と炉との距離はおよそ1.2mに復元できる。炉の深さは10~15cmほど、底面は掘り鉢状に床面は27.8mにあり、柱掘り方はその床面を除去してから明らかになった。床面上の遺物は第50図に示した土製紡錘車がある。焼土塊は西側でも発見されている。覆土中には弥生土器が検出されたが、完全な形での出土はない。また、接合作業をほどこしても完全な形になるものはない。土器片は5cm未満の小破片であるが、その形態的な特徴は26区 SD01・02や27区 SB01などの出土品に類似している。



第52図 29区 SB02平面・セクション(1/50)

29区 SB02出土品 (第50図 図版31)

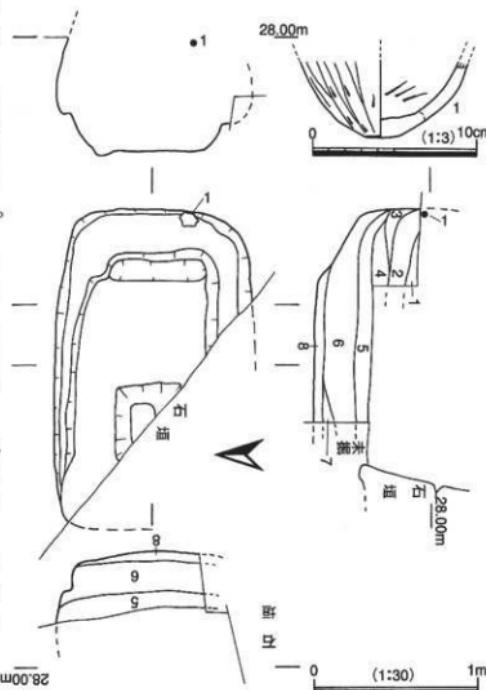
第51図は土製錘車の実測図である。完全な形で出土したものである。床面上で水平な状態で出土している。大きさは直径が4.9cm、厚さ1.2cm、重量22.9gである。断面でもわかるように外側に薄く作られる。胎土には角閃石・石英・白色粒子を含む。色調は明茶褐色で火を受けた痕跡はない。他に実測図に耐えうるような遺物は少ないが、観察したものを整理しておく。東西ベルト覆土内一括取り上げ品中に、器壁1cmで内面がヘラ削り調整の壺片があり、同じ出土位置で外外面に刷毛調整がみられる壺片がある。ほかに覆土中には手捏ねと思われる口縁部片と底部片、叩き(右下がり)痕跡のある台付壺片、外外面が刷毛調整の壺胴部片などがある。また5cm大の壺棺片も3点確認できた。砥石片もある。土器片の特徴は26区 SD01・02や27区 SB01などの出土品に類似している。

土 坑 (第53~55図)

26区から29区にかけての地区では堅穴住居や掘立柱建物などの建物のほかに、土坑が3基(29区 SX01, 29区 SK02, 27区 SK01)検出されている。そのうち29区 SK02は先述の住居跡(29区 SB02)の床面下で検出されたものである。また、29区 SX01からは土器片が出土している。以下にそれぞれ報告していく。

29区 SX01 (第51図 図版17~18)

29区 SB02の東側約3mで発見された土坑である。東西方向を主軸とする隅丸長方形の土坑である。東西長さ1.96m、南北幅1.2mの規模である。検出面からの深さは0.7m、上部がオーバーハングしているため、当時の生活面に近いと思われる。底面は平らで同じく隅丸長方形(南北幅0.8m、東西長さ1.6m推定)で、一段テラス面を設けている。底面には東寄りに南北方向の深い凹みがあり、西側中央には方形となる凹みがみられる。



第53図 29区 SX01(1/30・1/3)

第20表 29区 SX01 出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考
53	1	弥生土器 鉢	残存高 4.6	外面 下から上へケズリ 内面 ナデ(刷毛跡残り)	石英多い、角閃石、金雲母、安山岩白 色風化塵 にぶい赤褐色(Hue5YR5/4)	外面:黒斑

29区 SX01出土土器

(第53図 図版31)

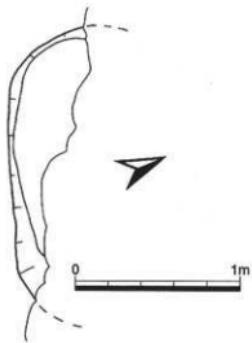
土坑から出土した土器片はその出土位置は土坑覆土のもっとも高い部分である。小型の鉢の底面と思われる。丸底の鉢で外面に丹念にヘラ削りが施され、内面は刷毛調整の後、ナデ仕上げである。内面は非常に滑らかな仕上がりである。着地面はやや平坦となる。着地面には摺れた部分がみられ、生活土器として利用されていた器であろう。

29区 SK02 (第54図 図版19)

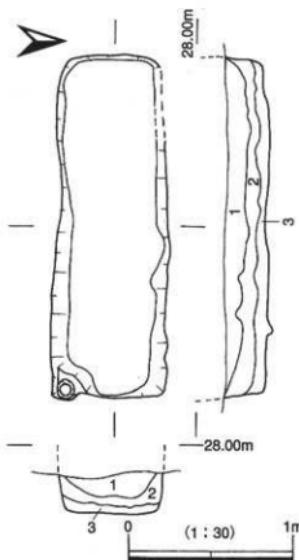
29区 SB02の床面除去後に検出された土坑である。一部が残り、北側は近世の水路により失われている。検出からの深さは30cm、東西の長さは1.8m、南北幅は1.0mである。東西方向主軸の隅丸方形土坑としておきたい。底面は平らで上場同様、隅丸長方形となる。出土品には実測可能な遺物もあるが、掲載できなかった。特徴的なものを列記しておく。壺棺片2点、壺胴部片多数、軽石1点、棒状の石器（長さ10cm×直径3cm）1点などがある。

27区 SK01 (第55図 図版19)

27区 SB01のすぐ東で検出された東西方向主軸の土坑である。おそらく墓であろう。平面形は隅丸方形で南東コーナーに柱穴をもっている。規模は東西長さ2.1m、南北幅0.66m、深さは検出面から0.25cmである。底面も上場同様に隅丸長方形で平らにつくられる。覆土はレンズ状にゆるく堆積している。出土遺物は見られなかった。



第54図 29区 SK02平面(1/30)



第55図 27区 SK01平面・セクション(1/30)

第4章 奈良・平安時代の溝

第1節 50区 SD01・SD02 (第56・57図 図版6・32)

1) 検出の状況

50区は長さ約40m、幅約7mの東西に長い調査区で、南側半分は既存の道路でコンクリートに覆われている。北側は水田として利用されており、南側の道路部分より80cmほど標高が下がる。北側の水田部分はかなり削平されており、表土を除去するとすぐに基盤層が露出する。一転して南側の既存の道路部分はコンクリートを剥ぎ取ると黒色土の古代遺物包含層が検出される。道路幅が狭く、また、簡易舗装であったため、その下に良好な状態で遺物・遺構が保存されていた。

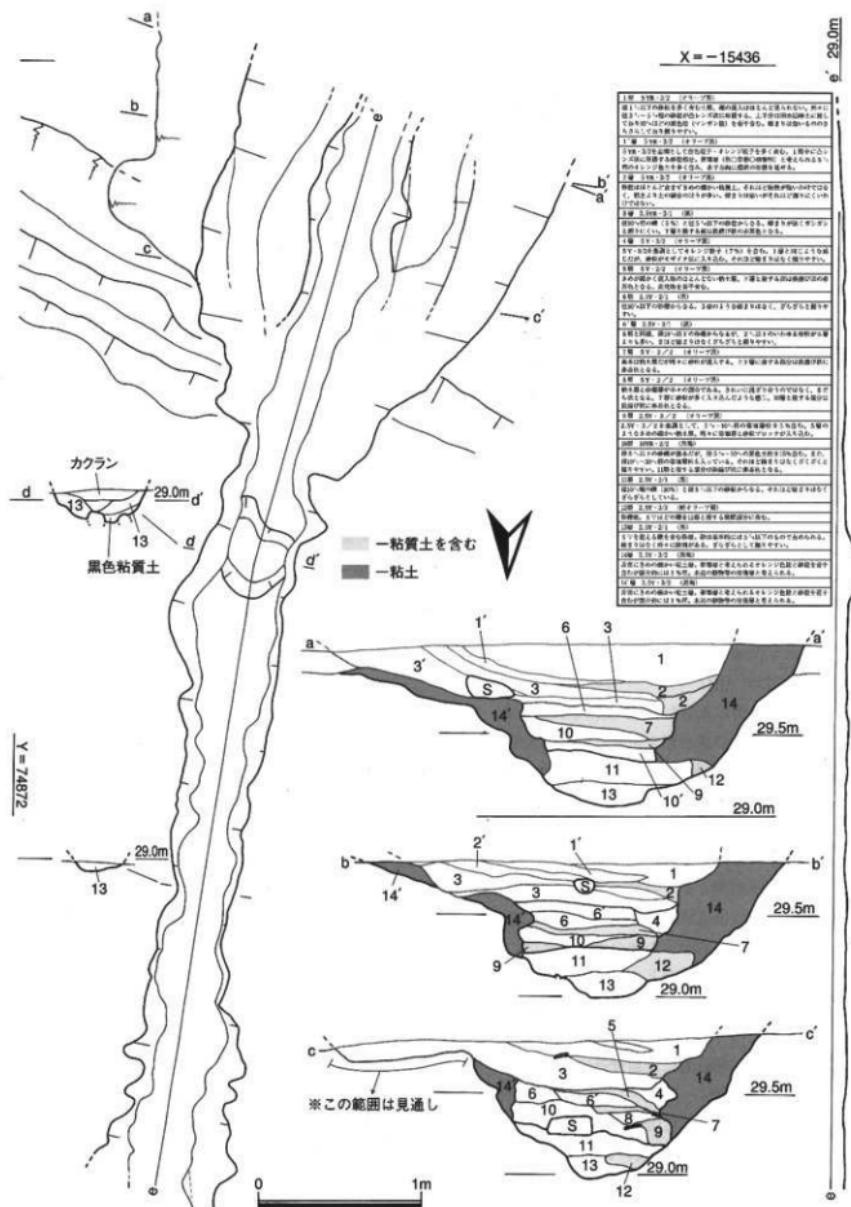
古代の溝 (SD01・SD02) は50区のはば中央を南から北へ向かって流れる。南側の道路部分は包含層除去後に遺構が検出されており、かなり当時の生活面に近いレベルで検出されていると考えられる。特に SD01東岸では土層の堆積状況から、遺構の掘り込み面から検出されていると考えられ、また、断面図の状況から西岸の方 (辻田・竹中2004報告の掘建柱建物群の検出された地域) が標高が高いことも推測される。北側の水田部分は、表土除去後に近世以降の浅い土坑があり、その土坑除去後に検出されている。したがって溝の底部のみがかろうじて検出されるにとどまる。したがって、第56図の平面図では溝の幅が大きく違うが、検出レベルの差が大きい為であり、第56図の最も南側が当時の溝の大きさをあらわしていると考えられる。また、溝は2時期にわたって使用されていることが確認されており、新 (SD01) 旧 (SD02) 関係は平面図・断面図では線のトーンの差で表している (トーンを落としてあるほうが新)。新しい溝は深さがさほど無く (断面図)、北側の水田部分では完全に削平されて消滅している。新旧の溝について以下詳細を述べる。

2) SD01 (旧)

当初の溝は長さ6.7mが検出されている。南側の道路部分で検出面幅1.8m、底面幅30cm~40cm、最大深さ1mの逆台形を呈す。北側の水田部分ではほとんどの部分が削平されており、底部に近い部分のみで、検出面幅80cm、底面幅30cm~40cm、深さ15cmを検出している。前回報告 (辻田・竹中2004) した12区~14区のSD01の東側約20mを、同様に南から北に向かって流れる。ただし、内部の遺物の検討により溝が同時期に存在していたとは考えにくい。12区~14区のSD01はかなり直線的に検出されたが、今回検出の溝は検出された範囲の中央部分で西側に角度を振ってある。溝の角度が変化する部分 (第56図d-d') は底面が窪んでおり、底部には黒色粘質土の堆積が見られる。角度の変化する部分以外はほぼ直線的な溝であり、人為的に「曲げられた」ものであろう。また、底面の窪みは人為的なものか、曲がった溝の水流の変化によって自然と掘り込まれたものか判断ができないが、溝底面の堆積物が他の部分とまったく違うことはこの部分の水の流れが他の部分とは異なっていたことを示すと考えられ、ほとんど削平されてしまいわずかに残った遺構の平面形からだけでなく、土層の堆積からも溝の「曲がり」の存在を確認できる。また、溝の断面形状は概ね逆台形であるが、平面図にも示すとおり部分的に底面付近にテラス状の平坦面をもつ。

3) SD02 (新)

新しい溝は長さ1.0m程が検出されている。南側の道路部分のみでの検出で、検出面幅2.0m、底面幅1.0m、深さ40cmの浅いレンズ状を呈す。検出面積が少なく、多くは語れないが、溝東岸はだらだらと傾斜しており、あまり整備されていない。このことは当初の溝の東岸が西岸より低く設定されていることと密接にかかわるものであろう。



第56図 50区古代の溝(1/30)

4) 50区 SD01・SD02の土層堆積状況

調査の結果3箇所の断面図を作成し土層の堆積状況から溝の埋没状況を観察している。各層の詳細については省略（図内に記載）し、ここでは大まかな堆積状況を記述する。いずれの断面でもほとんどの堆積層が砂礫及び灰色粘土であり、主に水流によって堆積したものと考えられる。土層堆積の状況は大きく4つに分かれる。

13層～11層（以下、下層）：ほとんど砂礫のみで構成されており、遺物（主に須恵器）の多くは摩滅していることから、水流によって運ばれてきた堆積物と考えられる。特徴的な遺物として、辻田・竹中2004報告の47区P-127より出土した須恵器壺（報告書41頁第29図P-127-4）と同様の口縁部片が検出されている。47区の掘立柱建物は一度建て替えられており2時期にわたって建物群が存続したことが判明している。P-127は新しい時期の建物の柱抜き取り跡から検出されている。47区では総数200基を超える柱穴が検出されているが、遺物がまとまって検出された柱穴はP-127のみで、建物廃棄時の祭祀的様相が濃いものである。したがってこの下層は47区建物群廃棄時期に近い時期に堆積していると考えられる。

10層～4層（以下、中層）：堆積単位が非常に細かく分かれしており、砂礫だけではなく土の混入も多い。また、c-c'に見られるような大きな礫も検出されており、出土する遺物（主に須恵器）についても大きく、摩滅も少ない。のことから、水流のみの堆積ではなく、人為的な土砂・廃棄物の投げ込み等が考えられる。上記の下層が建物破棄時期に近い時期と考えると、中層の土砂・廃棄物の投げ込み等は建物の廃棄に伴うものとも考えられる。

3層～1層（以下、上層）：下層と同様、ほとんど砂礫のみで構成されており、遺物の多くは細片で摩滅している。SD02掘り直し後の堆積で、14層や4層などは不自然に切られている状況が見られる。調査では下層・中層よりも土器片が多く検出されており、土層の堆積状況からだけでなく、出土遺物の内容からも時期差が想定される。

14層及び14'層：1層～13層までとはまったく異なる土質で非常にきめが細かく粘性が強い。調査時においても「掘る」というよりねじりがまのエッジで「切り取る」といった感じの土層。遺物も非常に少ない。11層より上部の溝の壁面に張り付くように堆積している。またa-a'を見るとSD01西岸では最上部まで検出され本來の造構面が削平されている状況が見て取れるが、東岸ではだらだらと広がりをもって検出されている。これはb-b'でも同様である。この14層の堆積は何を意味するのであろうか。現時点では14層は水辺に繁殖する「葦」などの植物遺体及びそこに堆積した「土」と考えている。したがって、前述したがSD01は東岸の方が西岸に比べて標高が低くなっていることが判る。また、14層の下端は、いずれの断面で見ても11層までしか下がらない。このことから、14層堆積時には11層付近まで水面があったことが推測される。

以上のことから、溝の埋没は、まず下層と14層から開始され、その後中層が水流と人為的な投げ込みにより埋没し、上層の新しい溝が掘られたことになる。

5) 小結（第57図）

以上のことからSD01・SD02について次のような使用・埋没状況が考えられる。SD01の堀削された時期は判然としないが、47区の堀立柱建物群と密接な関連があることは疑いの余地がないであろう。前述しているが、SD01の建物側（西岸）のほうが標高が高いことも堀立柱建物群の区画溝としての機能を端的に表していると考えられる。建物群の存続期間中もしくは同時に掘られた溝は建物の破棄の時期に近づくにつれ手入れが行き届かず葦などが壁面に生い茂るようになる。建物群廃棄前には底部にも砂礫が堆積してしまう。建物群廃棄時には水流のみならず廃棄された建物群の瓦礫・遺物等も

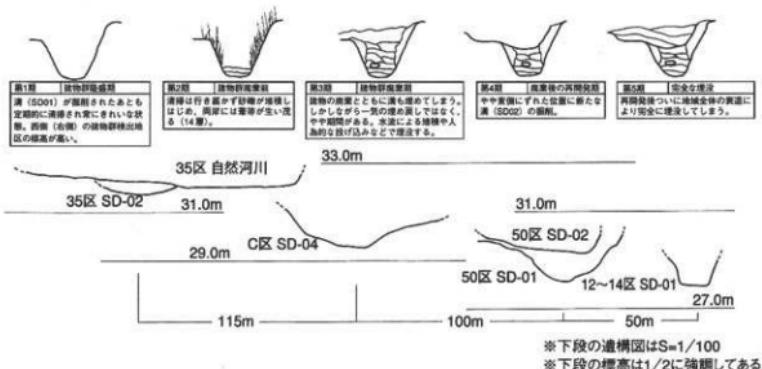
投げ込まれ、溝も廃棄されてしまう。その後それほど時期の開きは見られないが、新しい溝（SD02）がやや東にずれた位置に掘削されている。

SD01・SD02は内部の土層堆積から空掘りではなく「常に水の流れる溝」であることが判る。十園遺跡の地形から見ると50区の位置で幅50cm～60cm、水深20cmほどの水量（下層部分の範囲）を確保するには、遺跡西側を流れる土黒川から引き込む手立てではない。50区付近の現行の水田に水を引き込む取水口は約500m上流部分であるが、水稻耕作中でも幅30cmの用水路に水深10cm程度の水量である。このことを考えると、仮に当時の河床が今の標高より上にあったとしても、かなり大規模な水利工事がなされていたことが推測される。辻田・竹中2004で報告済みの「C区 SD04」や「35区自然河川及びSD02」は50区 SD01・SD02の上流、延長線上に位置している。このことからも十園遺跡及びその周辺の広範囲にわたって造成工事が行われていたと考えられる。また、SD01からSD02へ溝が造りかえられているが、建物群も廃棄され、溝の深さも減じたことで「衰退」してしまったような印象を受けるが、溝の底面レベルが60cm上がったということは、取水口もそれにあわせて上流に確保せねばならず、これまた大規模な工事が必要である。のことから、十園遺跡周辺地域の「衰退」というよりも「中心地の移動」に伴う溝の埋没・廃棄及び再生といった「周辺地域の再開発」の様子が伺える。

前回報告（辻田・竹中2004）した12区～14区のSD01とあわせて、十園遺跡47区付近では3本の大規模な溝が検出されている。建物群も1度建て替えられており継続してこの地を利用していた様子がうかがえる。遺物の検討では12区～14区のSD01のほうが新しい様相を示しており、47区の建物群の存在していた時期には50区 SD01が、建物群の廃棄後もしくはその前後以降には12～14区 SD01及び50区 SD02がこの地を流れていたものと考えられる。また、C区 SD04や35区自然河川及びSD02（辻田・竹中2004）との関連も密接と考えられ、遺跡範囲を越えてこれらの溝は検出される可能性もある。第57図は50区 SD01・SD02の埋没過程の想定図および十園遺跡検出の溝の断面図である。今概報では遺跡周辺の地形や河川等を含めての検討まで踏み込めなかったが、今後、積極的に分析を行いたい。

参考文献

辻田直人・竹中哲朗2004「十園遺跡」国見町文化財調査報告書（概報）第4集 長崎県国見町教育委員会



第57図 50区 SD01・SD02埋没過程想定図（上段）及び十園遺跡検出の溝断面（下段）